

京都府埋蔵文化財情報

第112号

長岡京跡右京第970次・下海印寺遺跡の発掘調査	岡崎研一	1
八幡市女谷・荒坂横穴群 女谷D支群の調査	引原茂治	5
平成21年度京都府内の埋蔵文化財調査	水谷壽克	9
平成21年度発掘調査略報		13
21. 棕ノ木遺跡(第8次)		
22. 井脇城跡		
23. 萬福寺松隠堂庫裏		
24. 下馬・片山遺跡		
25. 椿井遺跡(第3次)		
26. 上狛北遺跡・柳田遺跡		
発掘余話第1回 災害と考古学		23
長岡京跡調査だより・108		30
普及啓発事業		32
組織及び職員一覧		33
センターの動向		34

2010年7月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

長岡京跡右京第970次(7ANOSJ-5) ・^{しもかいいんじ}下海印寺遺跡の発掘調査

岡崎研一

1. はじめに

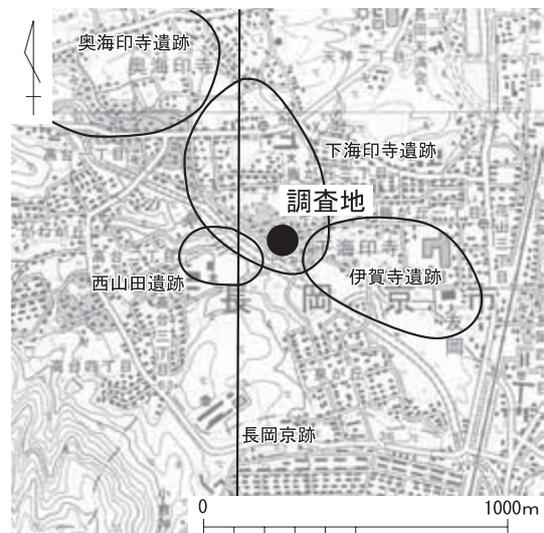
この調査は、京都第二外環状道路建設に先立ち実施した。調査地は、長岡京市下海印寺西条^{にしじょう}に所在し、小泉川左岸の段丘上にあたる。この地は、長岡京跡の南西部にあたり、右京七条四坊十一・十二町に相当する。また、集落遺跡である下海印寺遺跡にも含まれる。調査は、平成21年度の試掘調査の成果をもとに平成21年4月8日から翌年2月19日まで実施した。調査面積は4,000㎡である。

2. 調査概要

調査は、A～F地区に分けて行った。出土遺物としては、縄文時代の石鏃から近世陶磁器までのものが出土した。以下、主要遺構を概観する。

古墳時代初頭 この時代の遺構としては、A地区から竪穴式住居跡S H121を検出した。攪乱によって部分的に削平されており、全容については不明であるが、周壁に沿って一段高くなるベッド状遺構を有する。支柱穴は4か所で確認した。床面から焼土や炭化材が出土したことから、焼失した可能性も考えられる。出土遺物の中には熱によって変形した土器も確認している。この時期の遺構は、周辺の上内田・尾流地区(第2図)でも確認しており、段丘から低位段丘にかけて点在する。

古墳時代後期 この時代の遺構としては、A地区で竪穴式住居跡S H156を、C地区でS H127・350・351を、E地区でS H101～103の計7基を検出した。支柱穴は4か所で、北辺中央に竈を設けるものもある。住居は地形に沿って築かれたようで、その主軸は様々である。この時

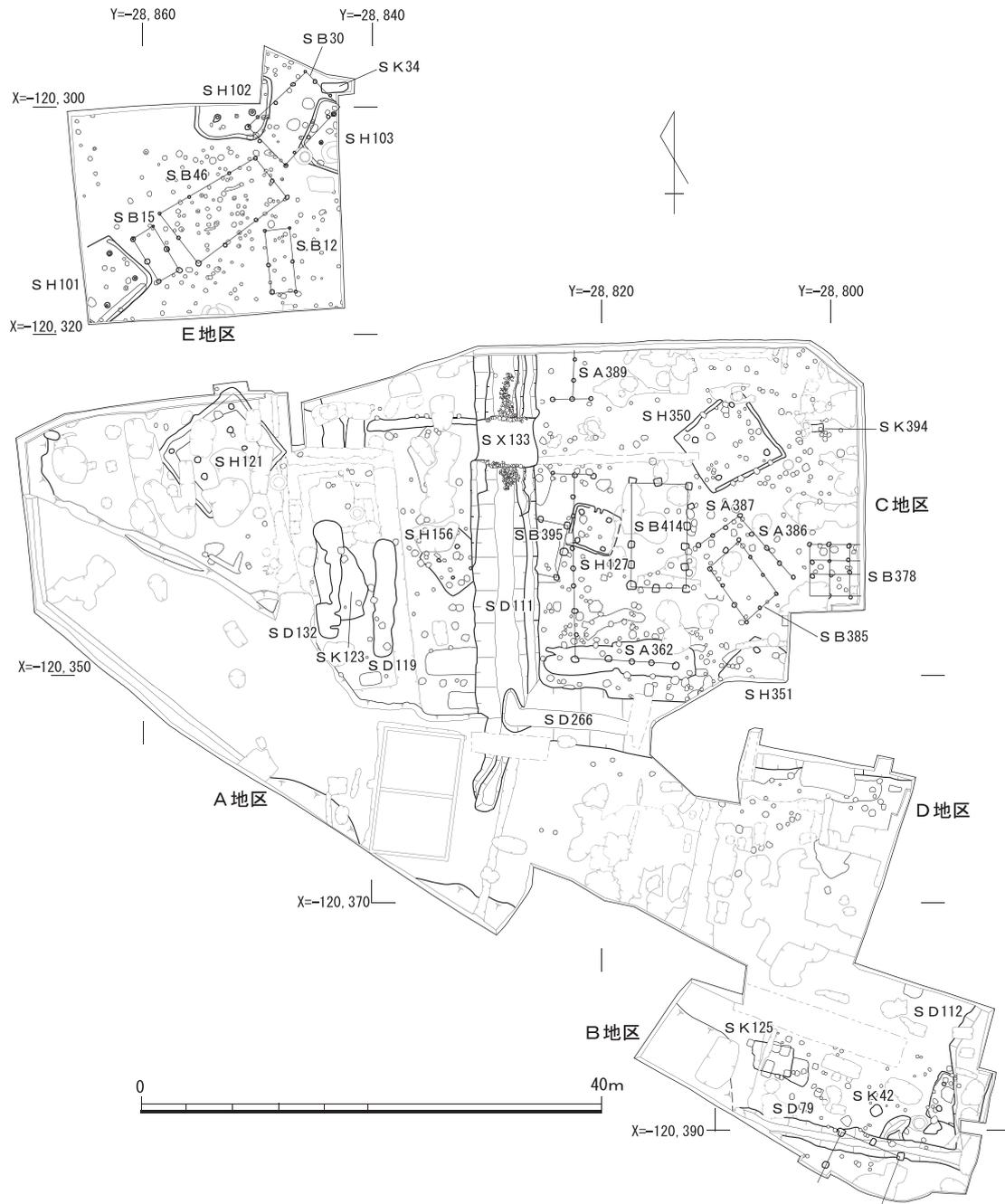


第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 調査地配置図

期の遺構は、調査地の北側である段丘上に集中することから、集落はC地区の北側の未調査地に展開するものと思われる。また、E地区で検出した竪穴式住居跡3基の埋土に、数個体分の須恵



第3図 遺構配置図

付表 規模一覧表

	地区	遺構番号	規模		地区	遺構番号	規模
竪穴式住居跡	C地区	SH121	7.5×9.0m	掘立柱建物跡	C地区	SB378	3間(4.5m)×2間(3.4m)以上
		SH156	4.4×4.4m			SB385	2間(3.6m)×3間(6.0m)
		SH127	4.4×3.8m		D地区	SB395	2間(4.5m)×1間(2.1m)以上
		SH350	7.2×7.6m			SB414	2間(4.6m)×5間(9.0m)
	E地区	SH351	5.0×3.2m以上		E地区	SB12	1間(2.2m)×2間(5.6m)
		SH101	6.6×6.6m			SB15	1間(2.2m)×2間(4.6m)
E地区	SH102	6.6×5.8m	SB30	3間(4.6m)×4間(7.0m)			
	SH103	6.0×4.0m以上	SB46	2間(5.6m)×3間(10.0m)			

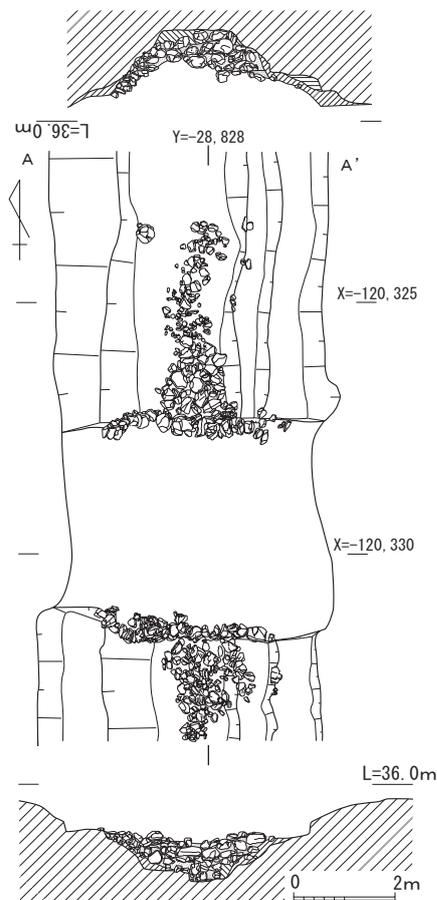
器器台の破片が混入した状態で出土した。付近に古墳が存在したことを示唆するものとする。

長岡京期 この時期の遺構は、A 地区で溝 S D119・132を、B 地区で S D79・112を検出した。これらの溝は条坊に伴うものではない。また、建物跡などの検出にも至らなかった。S D79からは、ミニチュアの竈・鍋や土馬が20数個体出土した。また、墨書人面土器と同形の土師器鍋も出土し、祭祀的な様相の濃い遺構と考える。なお、小泉川を挟んだ対岸には西山田遺跡が存在し、河道や溝から多量の祭祀関連遺物が出土しており、都城に伴う祭祀場と考えられている。

平安時代 この時期の遺構は、C 地区で平安時代末の堀跡 S D111によって大部分が失われた掘立柱建物跡 S B395を検出した。出土遺物からの時期決定には至らなかった。遺構の切り合い関係などから、この時期とした。

平安時代末 この時期の遺構は、主に C・E 地区で検出し、出土遺物や建物の向きなどから大きく 2 時期に分けられた。古い時期のものとしては、C 地区で堀跡 S D111・266、土橋 S X133、堀跡 S A362・388・389、掘立柱建物跡 S B414・378と、E 地区で土坑 S K34などを検出した。出土遺物から、11世紀末から12世紀初頭と考える(1期)。新しい時期のものとしては、C 地区で掘立柱建物跡 S B385と柵列 S A386・387を、E 地区で掘立柱建物跡 S B12・15・30・46を検出した。出土遺物から、12世紀前半と考える(2期)。

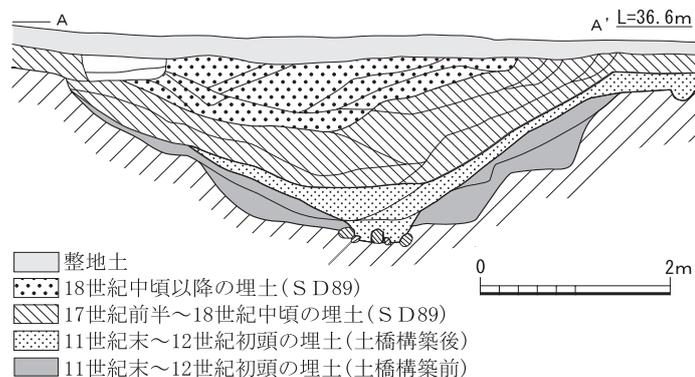
(1期) 堀跡 S D111は、幅約6.0m、深さ約1.8mを測り、真南北を向く。堀底や東側からの流



第 4 図 土橋 S X 133 実測図



写真 土橋 S X 133 近景



第 5 図 堀跡 S D 111 堆積断面図

入土から土師器皿・瓦器碗などが出土した。その時期は、11世紀末から12世紀初頭にかけてのもので、この時期以降の遺物は出土しなかった。S D266は、幅約5.0m、深さ約1.8mを測る。主軸方向はN86°Wである。堀底に灰色シルトが認められたことから、滞水していたものと考ええる。この両堀跡はL字状に屈曲する形で認められ、内部施設の配置状況などからも、堀で以って方形に区画された施設の南西四半分を検出したものと考えられる。

土橋S X133の幅は4.0mを測る(第4図)。仮に西辺を画する堀の中央に築かれていたとすると、堀跡の屈曲部から土橋まで25mを測ることから、50m四方の区画が想定できる。

土橋を築くに先立ち、部分的に暗渠による排水施設を設置していた。その排水施設内や裏込め土からも11世紀末から12世紀初頭の土器片が出土した。出土遺物からは堀と土橋の築造時期に差は認められなかった。

内部施設には、堀跡と掘立柱建物跡2棟がある。堀は、堀に平行する形でL字状に築かれていた。柱穴は径0.3m前後を測り、柱穴間の距離は1.5~2.1mと一定ではない。土橋付近は、6.5mほどの間隔で堀が途切れ、堀の柱穴の配置はT字形を呈す。

この堀の内側に掘立柱建物跡S B414が営まれていた。真北を向く。柱の掘形は0.7~0.9mを測り、径0.3mの柱穴が認められた。また掘立柱建物跡S B414の東側でこの建物に直交するS B378を検出した。一部調査地外に及ぶ。総柱建物で、柱穴は0.3m前後を測る。

土坑S K34は隅丸長方形を呈し、その規模は2.3×0.8m、深さ0.3mを測る。埋土内から土師器皿と白磁碗が混在した状態で出土したことから、墓である可能性がある。

(2期) 建物の主軸方向がN53°E前後と、北から大きく振る向きで建てられた掘立柱建物群である。1期の方形区画内からもこのような方位の建物跡が検出されたこと、堀内から12世紀前半以降の遺物が出土しないことから、12世紀前半には堀は埋まっていたものと考えられる。

近世 この時期の遺構には、溝跡S D89がある(第5図)。溝は、堀跡S D111と同じ位置で南北方向に掘削されていた。溝跡の規模は、幅5.9m、深さ1.2mを測る。埋土内から肥前磁器(伊万里)や肥前陶器(唐津)が出土した。時期は、17世紀前半から18世紀代にかけてのものが大半を占める。調査地の隣接地に、慶長10(1605)年の赦免状に寺名が記載された阿弥陀寺が所在し、出土遺物に香炉や花瓶が多く見られることから、阿弥陀寺に関連する遺構である可能性がある。

3. まとめ

調査の結果、古墳時代初頭の住居跡1基と後期の住居跡7基を確認した。古墳時代後期の住居跡は段丘上に広がり、その居住域の一画が確認できた。また、平安時代末には、推定50m四方を大規模な堀によって区画された施設が検出できた。内部に掘立柱建物跡などが整然と配置された状況からも、在地領主層の屋敷地であったと思われる。出土遺物からみると、11世紀末から12世紀初頭までの短期間で廃絶したようである。この地は、乙訓条里の五条七里にあたり、海印寺荘や鞆岡荘との関連が窺える。同時期の堀を伴う方形区画遺構は、久御山町の佐山遺跡で確認されている。(おかざき・けんいち=当調査研究センター調査第2課第2係専門調査員)

八幡市女谷・荒坂横穴群 女谷D支群の調査

引原茂治

1. はじめに

調査地は、八幡市美濃山荒坂65-2に所在し、八幡市の南側、京田辺市との市界に近い丘陵地に位置する。付近には多くの横穴があり、女谷・荒坂横穴群と呼ばれている。横穴は丘陵斜面に横穴を掘り込んで造られた墓で、今回の調査地の東側では、第二京阪道路の建設に伴う調査で52基の横穴が検出されている。これらの横穴は、古墳時代後期から飛鳥時代の頃に造られている。数基の横穴からは人骨が出土している。また、鉄地金銅貼の胡籙金具も出土している。これまで、女谷ではA～Cの3か所の支群が確認されており、今回検出した横穴群は女谷D支群となる。

2. 調査概要

平成20年度および平成21年度前半の調査で、横穴を5基確認した。周辺にさらなる横穴が存在する可能性が想定されたので、周辺を2,000㎡にわたって拡張して調査し、3基の横穴を確認した。結果的に、この支群には8基の横穴があることが判明した。

女谷D支群は、ほぼ北東から南西方向にのびる谷の北西側斜面に造られており、ほぼ南東方向に開口する。幅約40mの範囲に、横穴が密集して造られている。

今回検出した横穴のなかで最大のものは横穴1で、全長17m、玄室幅2mを測る。最小のものは横穴6で、全長10m、玄室幅1.5mを測る。横穴の平面形は羽子板状である。



第1図 調査地位置図（国土地理院 1/25,000 淀）

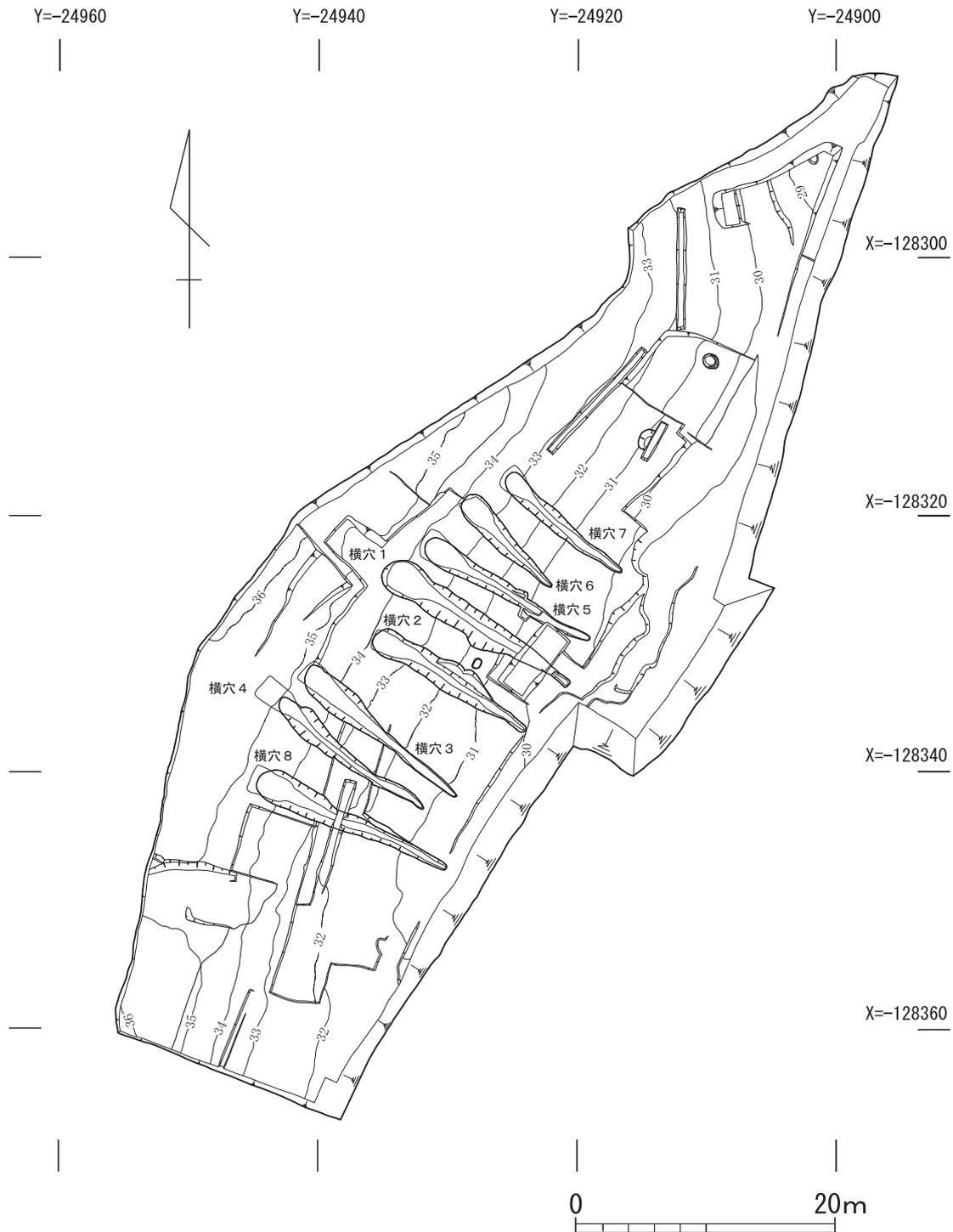
横穴1、横穴2、横穴6では、玄門部付近で主軸に直交する土手状の堆積を確認した。横穴を閉塞した痕跡とも考えられたが、下部から須恵器が多数出土し、高杯の割れ方などから、天井からの崩落土であると判断した。

横穴3では玄室奥、中央、玄門付近から耳環が2個ずつ出土しており、少なくとも3体の遺体の埋葬が行われたと考えられる。小規模な横穴6と横穴7では、副葬品も少なく、追葬は行われなかった可能性も考えられる。

それぞれの横穴には、須恵器・土師器などの土器類のほか、耳環（金環・銀環）や鉄製品（鏃）などが副葬されている。出土した土器な

どから、この横穴群は6世紀末から7世紀前半頃(古墳時代末～飛鳥時代)にかけて築造されたものと考えられる。

横穴4と横穴8では、内部がある程度埋まった段階で、墓として再利用された状況を確認した。須恵器や土師器が出土し、それらの土器から9世紀頃に再利用されたものとみられる。特に横穴4では、土器のほかに、ずいうんそうらんはっかきょう瑞雲双鸞八花鏡という銅鏡が副葬されていた。この瑞雲双鸞八花鏡は、



第2図 女谷D支群遺構配置図 (座標値は日本測地系による)

唐鏡を原型として日本で作られた踏返し鏡とみられる。鏡背を上にした状態で出土しており、下になっていた鏡面には紙の痕跡が残る。紙に包んで副葬されたものと考えられる。同様の鏡が、奈良県霊安寺跡から出土している。今回出土した鏡と比較すると、大きさや文様の状態が非常に類似しており、あるいは同じ鏡を原型として作られた可能性もある。今回出土した鏡は、



写真1 調査地遠景写真（北東から）

湯廻りが悪かったのか、周縁部の花形や雲形の文様が半周分鑄出されていないが、当時の貴重品と考えられる。

なお、ほとんどの横穴が、谷底付近から墓道を掘削しており、谷底を通路として使用していたものと考えられる。谷底部は、雨水などが流れたためか、浅く窪んでいる。この埋土から布目瓦片が出土しており、あるいは再利用された時期の通路であった可能性も考えられる。

3. まとめ

今回検出した横穴には、大きさ、副葬品の内容や多少などに違いがあり、被葬者の地位などが反映している可能性も考えられる。また、限られた場所に密集して横穴が造られている様子から、家族や一族のような血縁や地縁による集団が営んだ墓とも考えられる。また、横穴が配置されている間隔から、横穴1・2・5・6・7の5基と横穴3・4・8の3基のグループに分かれる可能性も考えられる。これらの横穴のうちでは、横穴4が最も早く造られたものとみられる。時期的には、6世紀末頃とみられ、やや遅れて、その他の横穴が造られたとみられる。時期を知る標式となる蓋杯が出土しない横穴もあるため、詳しい築造順は今後の検討課題であるが、規模の大きいものが先行し、小さいものが新しくなるものとみられる。なお、今回の調査では人骨が残る横穴は無かった。

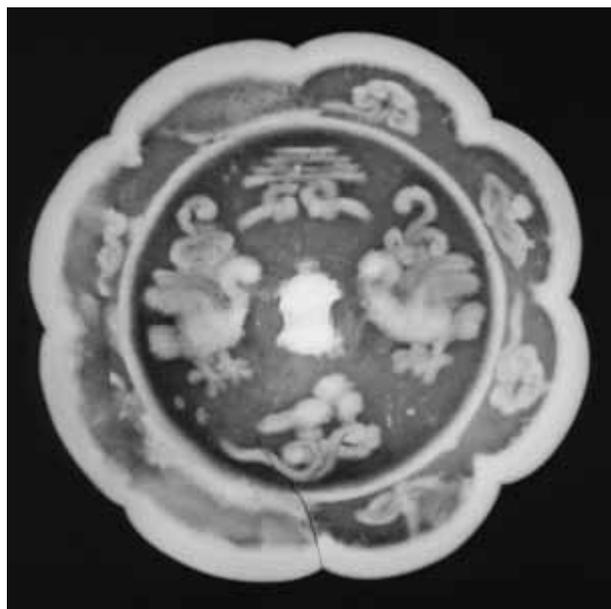
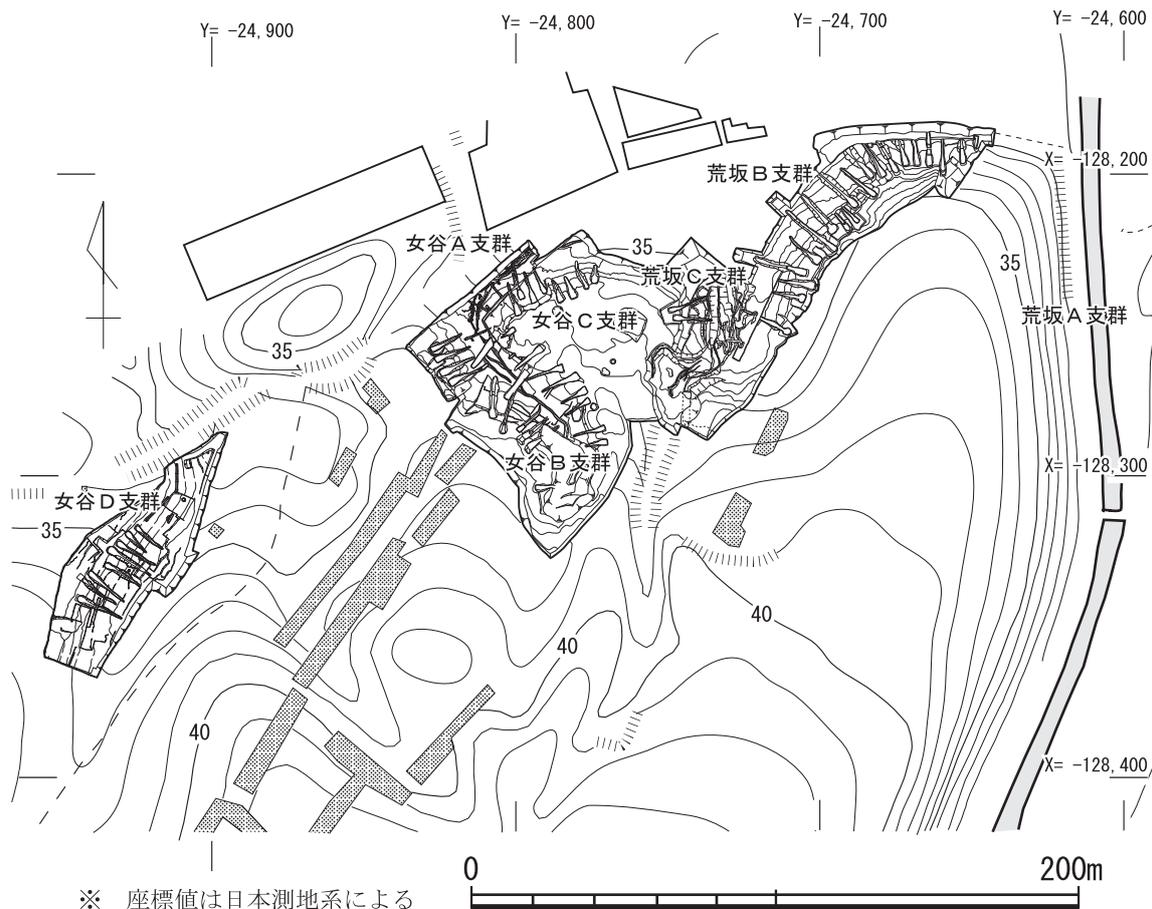


写真2 瑞雲双鸞八花鏡X線写真

女谷・荒坂横穴群では、これまで荒坂A～



第3図 女谷・荒坂横穴群横穴分布図

C支群、女谷A～C支群の調査を行っている。最も早く築造が開始されたのは荒坂B支群で、6世紀後半頃と考えられる。6世紀末頃には、その他の支群でも横穴の築造がはじまり、7世紀中頃まで築造が続く。今回調査したD支群は6世紀末頃に築造が始り、7世紀前半段階まで続くものとみられる。この横穴群の築造の最盛期に営まれた支群と考えられる。また、この支群は、限られた範囲内に密集して築かれており、ある一集落の墓所と考えることもできよう。他の支群とはやや離れた場所に営まれており、それらとの関係については、今後の検討課題である。

南山城地域、木津川左岸の京田辺市から八幡市にかけての丘陵上には、今回調査した女谷・荒坂横穴群のほかに、府史跡の狐谷横穴群など多数の横穴群が営まれている。また、八幡市の南に隣接する京田辺市には、「大住」という地名が残り、律令期以前から大隅隼人が居住していたという伝承がある。彼らは、宮殿の警護役や舞人として宮廷に仕えたと言われている。隼人の出身地である南九州地域には横穴が多く分布することから、南山城地域の横穴も隼人の墓とする説もある。ただ、南九州地域に特徴的な横穴である「地下式横穴」は、今回の調査でも確認できず、これまでの南山城地域の調査でも確認されていない。地名や伝承から、付近に隼人が多く居住していた可能性は考えられるが、現時点では、南山城地域の横穴と隼人を強固に結び付けるには至らないと考える。

(ひきはら・しげはる = 当調査研究センター調査第2課主任調査員)

平成21年度京都府内の埋蔵文化財調査

水谷壽克

当調査研究センターでは、平成21年度に京都第二外環状線道路や京都縦貫自動車道丹波綾部道路などに伴う調査をはじめ、付表のとおり27遺跡の調査を実施した。ここでは、当調査研究センター及び府・市・町が実施した主な調査を、京都府北部からその概要を紹介する。

宮津市^{なりあいじきゅうけいだい}成相寺旧境内および^{なんばの}難波野遺跡では、保存・整備事業にむけて範囲確認調査が行われた。成相寺旧境内の本殿前の調査では、11世紀から12世紀前半の遺物が出土した。また難波野遺跡では弥生時代中期の貼石墓の規模を確認する調査を実施したが、今回の調査では確認できなかった。

福知山市^{あまたうち}天田内遺跡では、元伊勢外宮豊受大神社前の府道拡幅に伴う調査で、狭小な範囲ではあったが弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が多数出土し、集落の広がりを確認した。

^{こうもりきた}河守北遺跡では、近世初頭の3条の石組溝と2条の木組溝及び取水用の石組枡を検出し、上下水道に伴う遺構であることを確認した。

綾部市^{きゅうたやま}久田山古墳群は弥生時代後期から古墳時代末まで総数90基を数える古墳群である。平成19年度からB支群30基の調査が実施された。6世紀中頃のB支群2号墳の調査では、玄室の奥行き4.5m、幅2.3m、高さ3mの横穴式石室が検出された。天井石も完存し、入口も完全に閉ざされた状態で検出され、埋葬時の状況を知る貴重な資料となった。

京丹波町^{いわきじょう}井脇城跡の調査は、本丸から延びる尾根の中腹に、平坦部の広さ約200㎡の曲輪と60㎡ほどの帯曲輪、三日月形に巡る土塁及び堀切を確認した。

南丹市^{おおたにぐち}大谷口遺跡は、弥生時代中期から鎌倉時代にかけての集落遺跡として知られている。今回の調査で、縄文時代晩期の土坑や古墳時代中期の造り付けのカマドをもつ竪穴式住居跡を検出した。造り付けカマドは近畿地方での導入期のもので、この地域に早い時期から先進的な技術が導入されていたことが判った。

亀岡市^{くらがいち}蔵垣内遺跡の調査では、丹波国分寺が築かれた丘陵裾部に広がる、弥生時代から中世に至る集落跡として知られた遺跡である。今回新たに弥生時代後期の竪穴式住居跡1基を確認し、遺跡の北端部まで集落が広がっていることが明らかとなった。また丘陵部に広がる国分古墳群では、田畑の下に埋もれていた6世紀後半の古墳2基を新たに検出し、総数60基以上の古墳群であることが判明した。



写真1 福知山市河守北遺跡の上下水道



写真2 京丹波町井脇城跡曲輪全景

京都市北白川追分町遺跡^{きたしらからおいわけちょう}では、縄文時代晩期の樹木の幹が出土し、石斧などによる加工痕跡が確認された。

西京極遺跡^{にしきょうごく}では古墳時代後期の移動式カマド「韓竈」が出土した。秦氏との関係が注目される。

東寺旧境内^{とうじきゅうけいだい}の調査では、平安時代後期の柱跡や溝跡等が検出され、東寺の寺務を担う「政所院」に係る遺構とみられている。

清水寺境内馬駐跡^{うまとどめ}の調査は、明治30年に約10m北側に

ひきや
曳屋された馬駐の解体修理に伴って実施した。馬駐は、文明元(1469)年に焼失し、室町時代後期には再建されている。参詣者の馬を一時的に仮繋ぎする建物で、馬を飼う厩と用途も形態も異なり、全国的にも類例が少なく貴重な建物である。今回の調査では、移動される前の位置及びその構造等を確認するために実施したところ、江戸時代頃に掘られたとみられる20基ほどの小土坑を検出し、礎石を設置するための地固め痕跡と考えられた。

かみさと
上里遺跡では、長岡京跡一条大路南側溝と弥生時代前期の竪穴式住居跡3基以上、土坑、炉跡等が検出されている。また縄文時代晩期では、竪穴式住居跡や土器棺墓が検出されており、墓域と居住空間が位置を違えて占地する集落構造が明らかとなった。

かわしまやかた
革嶋館跡の調査では、幅4.5m以上の水堀2条が検出された。『革嶋家文書』の江戸時代中期の絵図に土塁と堀に囲まれた居館が描かれており、居館の西南部を確認したこととなる。

ながおかきゅう
向日市長岡宮跡第472次調査では長岡宮第二次内裏「東宮」の東南部で東脇殿の身舎の柱列と内裏南面築地回廊の雨落ち溝が確認され、内裏の機能を知る貴重な資料が得られた。

なんじょう
南条3号墳(5世紀中頃)は、今までの測量及び範囲確認調査により、葺石・埴輪を伴う推定径23.5m、高さ3.5mの円墳で、墳頂部中央には盗掘坑があることが確認されていた。今回の調査で、墳頂部で長軸3.7m、短軸2.4mの墓坑を検出し、さらにその中央部に長さ2.2m、幅1.4mの木棺痕跡が確認された。

ながおかきゅう しもかいんじ
長岡京市長岡京跡・下海印寺遺跡の調査では、古墳時代後期の集落の広がりとともに、長岡京に伴う土馬やミニチュア土器が出土し、京域の南西隅で行われた祭祀遺構と考えられた。小泉川を挟んだ対岸の西山田遺跡との関係が注目される。また、方形に区画された堀と土橋及び2棟



写真3 長岡京市伊賀寺遺跡の竪穴式住居跡

の掘立柱建物跡・柵列を検出し、11世紀末から12世紀初頭に築かれた在地領主層の屋敷地を確認した。

いがじ
伊賀寺遺跡の調査では、これまでの調査と合わせ、縄文時代中期～後期の竪穴式住居跡21基、土坑墓等を確認した。中期から後期にかけて、居住空間と墓域の変遷を知る資料である。

まつだ
大山崎町長岡京跡・松田遺跡の調査では、古墳時代の竪穴式住居跡2基を確認した。

大山崎町国史跡^{おおやまざきかわらがま}大山崎瓦窯跡は 9 世紀前半頃の瓦窯で、平安京や離宮、西寺等の寺院に瓦を供給した瓦窯跡で、整然と配置された 6 基の窯が検出されている。今回、指定地の北側でさらに 2 基の窯が計画的に築かれていることが明らかとなった。

宇治市^{うじがわたいこうつつみ}宇治川太閤堤跡では、4 基目となる護岸を守る石垣「石出」が確認された。

八幡市^{おんなだに あらさか}女谷・荒坂横穴群の調査では、第二京阪自動車道建設に伴って 52 基の横穴墓が調査されている。今回の調査で、さらに 8 基の横穴を検出し、南西側に支群が広がることが明らかとなった。また、2 基の横穴は、平安時代初めに墓として再利用されており、1 基の横穴では土器とともに青銅鏡「瑞雲双鸞鏡」が副葬されていた。

京田辺市^{みなみやま}南山遺跡では、弥生時代中期の平面形態の異なる竪穴式住居跡が 13 基確認されている。南山城地域ではこの時期の方形住居は珍しく、注目された。

城陽市では、3 世紀の前方後円墳である国史跡^{しばがはら}芝ヶ原古墳の整備に伴う発掘調査が継続されており、今年度はくびれ部の確認調査が行われ、バチ状に開く可能性が濃厚となった。

井手町^{いでてら}井手寺跡の調査では、南面築地の溝が確認され、寺域の南北規模が 240m であることがほぼ明らかとなった。

精華町^{げば}下馬遺跡・^{かたやま}片山遺跡は、平安時代から中世の集落跡である。平安時代後期には総柱の掘立柱建物や柵列等を検出し、14・15 世紀には瓦や香炉の出土から寺院等に関する建物の存在が明らかとなった。

木津川市^{こうづ}上津遺跡は、古代の港「泉津」に設置された官の施設と想定されている。今回、倉庫とみられる掘立柱建物跡と、漆膜の付着した長頸壺など多量の遺物が出土した。恭仁京や平城京の都の物流拠点としての「泉津」の実態を明らかにする貴重な成果が得られた。

万葉歌木簡が出土した^{ばほみなみ}馬場南遺跡では、「神雄寺」に流れ込む水路の上流側を調査し、水源と見られる地点から水の祀りを行ったとみられる灯明皿が多数出土した。

国史跡^{こまでら}高麗寺跡の調査では、西廻廊横の溝内より、西廻廊に使用された多量の瓦とともに 12 世紀末から 13 世紀初頭の土器が出土した。7 世紀初頭に創建された高麗寺が 13 世紀初頭まで存続していたことが明らかとなった。

国史跡^{くにきゅう}恭仁宮跡では、朝堂院地区の調査で朝堂院と朝集殿院を区画する大規模な柵(塀)の跡が確認できた。このことより、従来の想定より朝堂院は南北長がやや短くなり、朝集殿院は長さ・幅ともに大きくなった。



写真 4 八幡市女谷・荒坂横穴群の横穴



写真 5 精華町下馬遺跡の掘立柱建物跡

(みずたに・としかつ = 当調査研究センター調査第 1 課主幹)

付表 平成21年度京都府埋蔵文化財調査研究センター発掘調査一覧

番号	遺跡名	所在地	現地調査期間	調査面積(m ²)	概要
1	中山城跡	舞鶴市	11～12月	320	曲輪。鎌倉時代以降の土師器、磁器、須恵器
2	天田内遺跡	福知山市	4～6月	350	弥生～古墳時代の柱穴、土坑
3	仲ノ段遺跡	福知山市	6～8月	500	縄文～中世の遺物包含層。中世の柱穴、土坑
4	河守北遺跡	福知山市	4～6月	150	近世初頭の石組溝(上下水道)
5	深志野古墳群	京丹波町	5～6月	500	中世の流路
6	丁谷古墓	京丹波町	8～9月	200	顕著な遺構・遺物なし
7	井脇城跡	京丹波町	10～2月	1,400	曲輪、土塁
8	大谷口遺跡	南丹市	5～10月	2,000	弥生時代の土坑。古墳時代の竪穴式住居跡
9	蔵垣内遺跡	亀岡市	4～2月	3,200	弥生時代後期の竪穴式住居跡 横穴式石室1基他(国分古墳群)。中世の柱穴
10	慈照寺庭園	京都市	6月	20	中世～近世の整地層
11	平安京跡	京都市	11～12月	150	中世溝。土師器、須恵器
12	清水寺境内馬駐跡	京都市	9月	50	近世頃の柱穴
13	長岡宮跡	向日市	7月	60	平安時代の溝、中世の土坑
14	長岡京跡・上里遺跡	長岡京市	10～12月	360	流路跡2条
15	長岡京跡右京第970・973・984・988次ほか	長岡京市	4～2月	7,840	平安時代後期の堀、掘立柱建物跡 長岡京期の溝他 古墳時代の竪穴式住居跡 縄文時代中期～後期の竪穴式住居跡、土坑墓 竪穴式石室1基・家形埴輪等
16	長岡京跡右京第969次	長岡京市	4～9月	2,230	中世の柱穴 古墳時代の竪穴式住居跡 弥生時代中期の土坑
17	長岡京跡右京第968次	長岡京市	4～11月	2,100	中・近世の溝、流路
18	長岡京跡右京第971次・松田遺跡	大山崎町	4～6月	150	古墳時代の竪穴式住居跡
19	長岡京跡右京第974次・松田遺跡	大山崎町	6～7月	300	古墳時代の竪穴式住居跡
20	女谷・荒坂横穴群	八幡市	6～2月	2,000	古墳時代末期～飛鳥時代初頭の横穴墓8基 横穴再利用に伴う副葬品、9世紀の八花鏡
21	新田遺跡	八幡市	10～12月	500	顕著な遺構・遺物なし
22	萬福寺松隠堂庫裏	宇治市	12月	50	江戸時代前期～後期の礎石、カマド
23	片山遺跡	精華町	7～2月	2,500	奈良時代の柱穴
24	下馬遺跡				平安時代～中世の掘立柱建物跡群、溝、土坑
25	棕ノ木遺跡	精華町	11～3月	500	中世の柱穴、土坑。ふいご
26	椿井遺跡	木津川市	10～2月	1,200	弥生時代の土坑、飛鳥時代の溝、中世の土坑
27	上粕北遺跡	木津川市	10～2月	1,000	奈良時代の溝、中世の溝、土坑

平成 21 年度発掘調査略報

21. 椋ノ木遺跡(第 8 次)

所在地 相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木
 調査期間 平成21年11月26日～平成22年 3 月 4 日
 調査面積 150㎡

はじめに 調査は、木津川上流流域下水道木津川上流浄化センター建設工事に先立ち実施した。当遺跡は、木津川左岸の自然堤防上に位置する縄文時代から中世にかけての複合集落遺跡で、過去 7 度の調査によって縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡、後期古墳、平安時代末～鎌倉時代の建物跡などのほか、条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝群などが確認されている。

調査概要 汚泥浄化タンク建設予定地である A トレンチと汚泥濃縮棟建設予定地である B トレンチの 2 か所で調査を実施した。

A トレンチでは、第 1 面は中世(鎌倉時代)、第 2 面は古墳時代と平安時代末～鎌倉時代、第 3 面は縄文時代の合計 3 面の遺構面の調査を実施した。第 1 面では、土坑から瓦器椀や土師皿、羽釜、焼土、炭、鉄滓、フイゴの羽口、石鍋など鍛冶に関連する遺物が出土した。第 2 面では、平安時代末ごろの柱穴から、20 枚の土師皿が出土した。第 3 面では、縄文時代と思われる落ち込み状の浅い土坑や杭跡を検出した。

B トレンチの遺構面については近接地の調査結果から、2 面の遺構面が想定された。しかし、第 1 面となる中世(平安時代末～鎌倉時代)の遺構面で土坑やピットを検出したが、第 2 面となる縄文時代の遺構・遺物は今回の調査トレンチ内では確認できなかった。

まとめ A トレンチの第 1 面で検出した土坑から、フイゴの羽口などの鍛冶関連の遺物が出土したことから、小規模ではあるが集落内で鍛冶作業を行っていたことが確認できた。また、第 2 面の平安時代末頃の遺構では、柱穴から 20 枚の土師皿が重なった状態で出土し、何らかの儀礼が行われたと考えられる。



(村田和弘)

調査位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

いわきじょう 22.井脇城跡

所在地 船井郡京丹波町井脇井壁谷

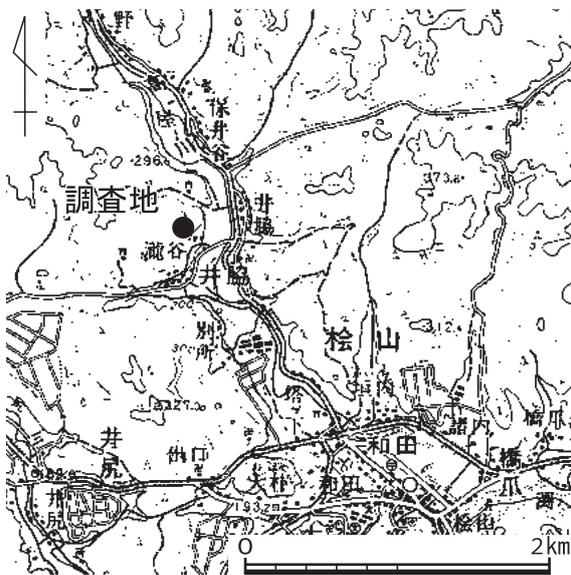
調査期間 平成21年10月29日～平成22年2月25日

調査面積 1,400㎡

はじめに 今回の発掘調査は、国土交通省による丹波綾部道路の建設工事に先立って実施した。井脇城跡は中世山城として知られ、国道173号線の西側、井脇集落の背後の山上にある。ほぼ標高300mを測る頂部の中心部(主郭)は、今回の発掘調査の対象外ではあるが、複数の曲輪や堀切が認められる。しかし今まで、井脇城跡の築造時期や城主はもとより、全体の構造についても不明であった。今回の調査によって、中心施設から東に離れた曲輪の内容が明らかになった。その成果について報告する。

調査概要 調査対象外の井脇城跡中心部には、土塁をめぐらせた長さ20～25m、幅13～15mを測る平坦な曲輪が2つと、一段低いところに設けられた小さな帯曲輪または腰曲輪がみられ、さらにこれらの曲輪の西側には、尾根に直交する堀切(長さ20m、幅2m)を確認することができる。

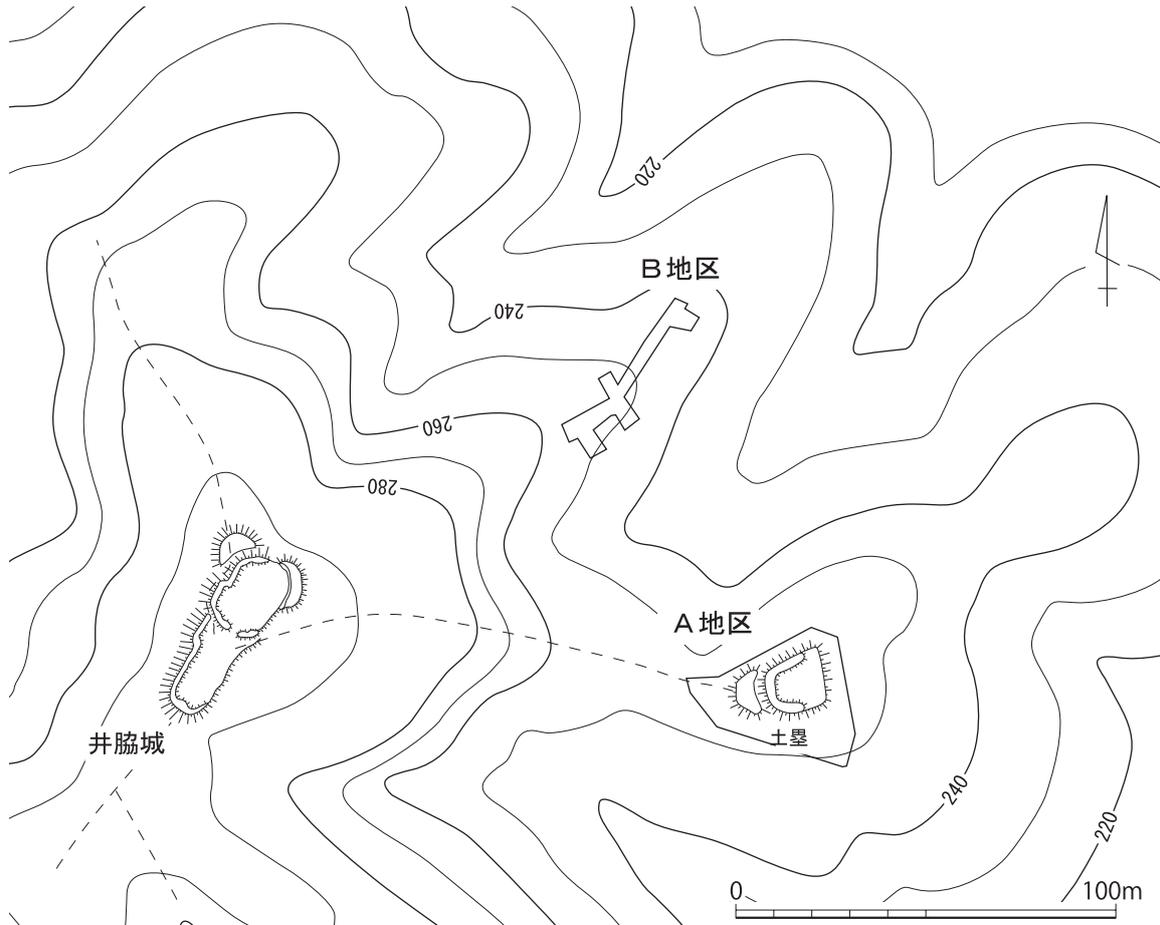
A地区は、井脇城の中心部から東方向に150mほどの尾根上にあり、周囲から独立した曲輪となっている。頂部には200㎡程度のいびつな平坦面が造り出されており、平坦面の周囲には、東側を除き「コ」の字形に土塁が築かれている。最も残りのよい部分で見ると、土塁の幅は約2.5m、高さは約1.2mを測る。土塁は断面の観察から、平坦面を岩盤まで削り出すことによってできた土砂を積み上げて造られていた。この曲輪の西側には、半円形の腰曲輪(8×10m)が取り付けられている。しかし、A地区の頂部平坦面、土塁、腰曲輪のいずれからも建物や柵を推定できるような柱穴その他の遺構はみつからなかった。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 綾部)

出土遺物は、築造当時のものと考えられるものは瓦質土器の播り鉢とみられる破片2点だけである。室町時代(16世紀代)のものとみられる。播り鉢の性格上、この地で食材や薬剤の調理・調合などの作業をしたかもしれないが、建物跡などを検出しなかったことから、少なくとも長期間にわたる日常生活は営んでいなかったと考える。

B地区は、A地区から北側の谷をはさんで対面する尾根上の部分である。この地区では、200㎡の調査区を設定して調査を行ったが、遺構・遺物などは見つからなかった。B地区は井



第2図 調査地トレンチ配置図

脇城の中心部から北東に下る尾根に位置することから、通路等に利用されていたのであろう。ここからは東西方向に延びる谷部を眼下におさめることができる。

まとめ 今回の井脇城跡の調査で、周囲から独立して設けられた土塁を有する曲輪を明らかにすることができた。また、A地区の曲輪東斜面から瓦質土器の播り鉢の破片が出土したことから、築城時期を室町時代後期に比定できる。こういった点で、中世末期の山城の構造などを考える上で、基礎的な資料を得ることができた。しかし、掘立柱建物や柵列などの遺構は検出されず、遺物の出土もほとんどないため、井脇城自体の全体像や存続時期・細かな変遷などは不明と言わざるを得ない。

また、A地区の曲輪からの眺望は良好で、眼下に国道173号線が走り、高屋川の流れる東側の谷部のほぼ全景を見渡すことができる。さらに周辺には山内氏の居城と伝承される橋爪城跡と三ノ宮東城・西城跡が存在している。井脇城跡はその眺望のきく地理的条件から、見張り台的な役割を担っていた可能性が指摘できる。井脇城と同じ谷筋や周辺には、三ノ宮城跡や橋爪城跡のほかにも、城主は不明ながらも八幡山城跡、垣内城跡、和田城跡などの城跡がある。今回の丹波綾部道路建設に伴って、三ノ宮東城跡などの調査が計画されており、今後の調査成果が期待されるところである。

(黒坪一樹)

まんぶくじしやういんどうくり
23. 萬福寺松隠堂庫裏

所在地 宇治市五ヶ庄三番割34

調査期間 平成21年12月1日～12月25日

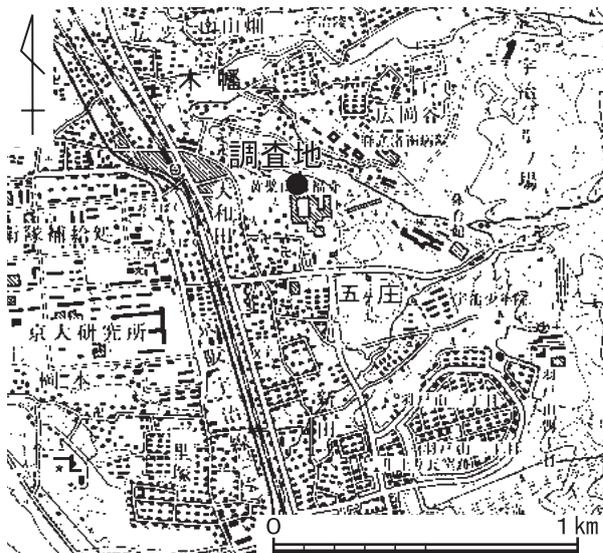
調査面積 50㎡

はじめに 今回の発掘調査は、京都府教育委員会が実施する重要文化財萬福寺松隠堂庫裏ほか2棟の保存修理工事に伴い実施したものである。調査地は、萬福寺三門の北、塔頭松隠堂に付属する庫裏(台所)の床下である。松隠堂は寛文4(1664)年に退隠した隠元禪師が同13(1673)年まで晩年を過ごした所であるが、当時は開山堂の参道の東、現在の中和園にあり、延宝5(1677)年に現在地に曳屋された。この庫裏は東西6間・南北4間の柿葺きの建物で屋根に2か所の煙出しがあったことなどが、建築部材の検討から判明している。今回修理のために解体された庫裏は北に1間拡張され、煙出しも1か所になっていた。

今回の調査の目的は、曳屋当初の竈の位置と拡張前の南北4間時代(現在は南北5間)の痕跡を探ることであった。

調査概要 幅50cmのトレンチを計画的に配置し、一部拡張した。

掘削前から現在の庫裏(第2図一点鎖線範囲)の柱に関係しない礎石(ち七、ほ七とその2m東の礎石、ち六)が存在していた。調査開始後、同様に現存の柱に無関係の地点で礎石の据え付け痕跡を検出した(旧り五、旧ほ三)。また、建物西の側柱の礎石(り列)は、東の客殿から続く整地土ではなく、後から補った土砂の上に据えられていた。これらの事実を受け、旧と七、旧と六、旧に六、旧り四の4か所で確認の断ち割りを行った結果、4か所すべてで礎石を設置した痕跡を検出した。このことから、1677年の曳屋後の庫裏は、現在の庫裏より1間東に建てられていたこと

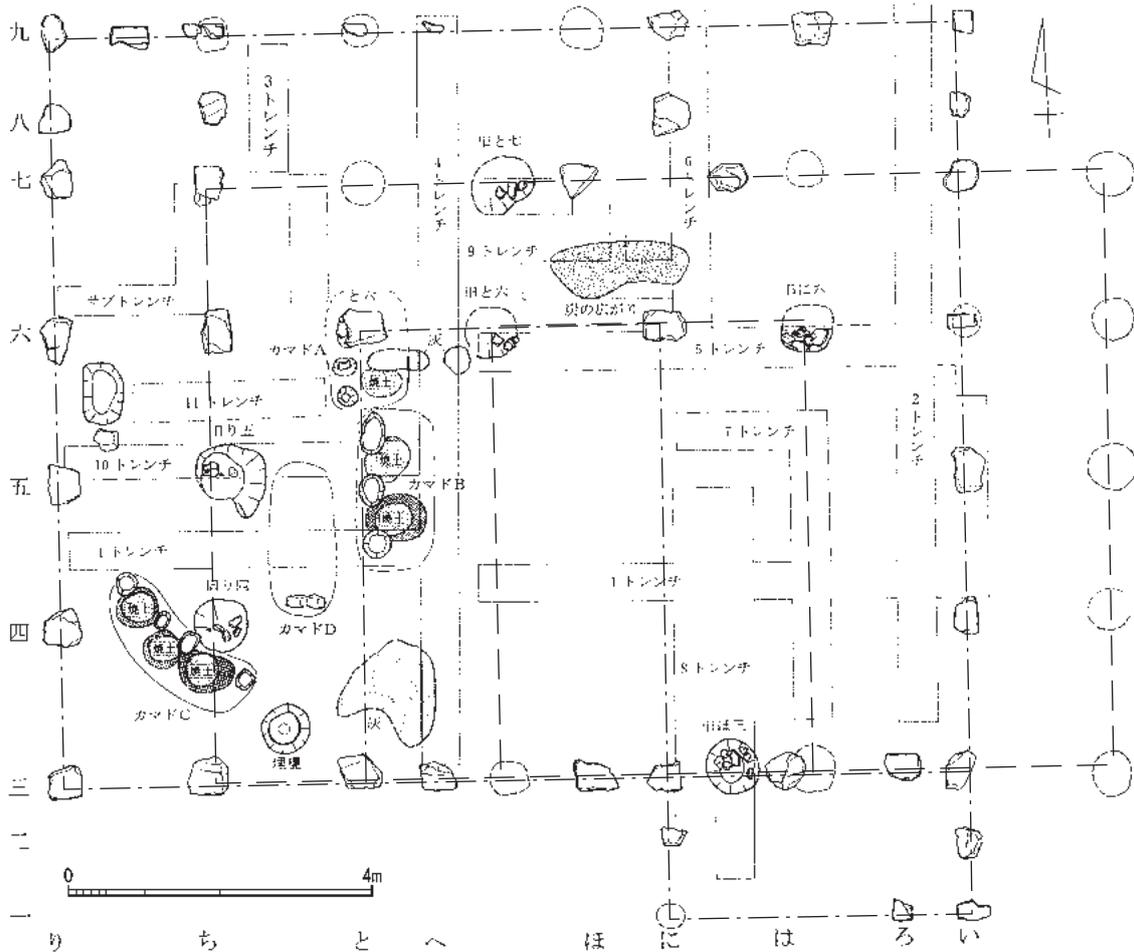


第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 宇治)

とが判明した(第2図破線で復元した範囲)。この場合、「七列」の今は使われていない礎石(ほ七とその2m東の礎石)が方立(入り口の両側の柱)の位置になることから、曳屋直後の庫裏は南北4間であり、今より1間南の1間東に北の出入り口があったことも確認した。

この庫裏がさらに西へ1間分曳屋されたのは、おそらく元禄7(1694)年に東に接する客殿が建て替えられた時代であろう。

竈については、調査着手前から3か所の焼土(カマドAの南側1か所とカマドBの2



第2図 調査トレンチ位置図

か所)が残っていた。調査開始後、南西の隅で北西から南東に並ぶ3か所の焼土(カマドC)を検出した。カマドCは3つの焚口を北東側にもつ竈である。

竈の設置面等の検討により、以下の結論を得た。最初、延宝5年の曳屋直後に、カマドAが当初の西側煙出しの真下に築かれた。元禄7年に庫裏が1間西へ曳屋されると、大黒柱「旧と六」が西に移動して「と六」にきた時、カマドAは大黒柱を避けてその南側にカマドBが造り直され、その後、南西隅のカマドCに移った。なお、東の煙出しの真下に当たる部分(い六付近)にも竈が想定されたが、調査の結果その痕跡は検出されなかった。

出土遺物 調査地は土間と床下であり、出土する遺物も表土に混じったような状態であった。江戸時代前期に遡るものには中国明末期の白磁と青花の小碗がある。中期の遺物は一般的な陶磁器類であるが、江戸時代後期から幕末にかけては煎茶茶碗として使用されたい京焼や染付の小碗類が多い。中国製の染付小碗、急須や蓮華、燈明皿の類もみられる。

まとめ 文化財の解体修理に伴う発掘調査において、考古学的方法によって2度目の曳屋の痕跡を検出できた意義は大きい。また、出土遺物は、全体として煎茶関係の陶磁器類が際立ち、隠元禅師ないし萬福寺が日本の煎茶道の開祖とされるにふさわしいものである。

(小山雅人)

24. 下馬・片山遺跡

所在地 相楽郡精華町下狛小字下馬・片山
調査期間 平成21年7月21日～平成22年2月23日
調査面積 2,500㎡

はじめに 今回の発掘調査は府道八幡木津線道路整備事業に伴って実施した。下馬遺跡と片山遺跡は、木津川左岸の甘南備丘陵東裾の扇状地に所在する。平成20年度から調査対象地内で調査を開始した。平成21年度は、遺構・遺物の分布密度の高い地点を中心に面的調査を行った。面的な発掘調査は、下馬遺跡でA1～3地区、B1地区、D1・2地区の6か所、片山遺跡はA1地区の1か所で行った。

調査概要

1) 下馬遺跡 調査対象地は丘陵裾部の扇状地にあり、西から東に向かって下がる階段状の耕作地が広がる。西端のA1地区と東のD2地区との遺構面の比高差は最大約11mを測る。

A1地区 谷河川とみる流路SR125、瓦溜りSK120、井戸SE129、炉跡SK121、土坑SK12の遺構を検出した。このうち、SR125が縄文時代晩期、それ以外の遺構が室町時代に属する。出土遺物には、縄文土器片(深鉢)、サヌカイト製石匙、瓦、火舎(土師質・瓦質)等がある。

A2地区 南北棟の掘立柱建物跡SB58を検出した。建物規模は2間×3間以上を測る。

A3地区 奈良時代の河川跡SR16と橋状遺構を検出した。須恵器平瓶や土師器甕等の土器がSR16から出土した。

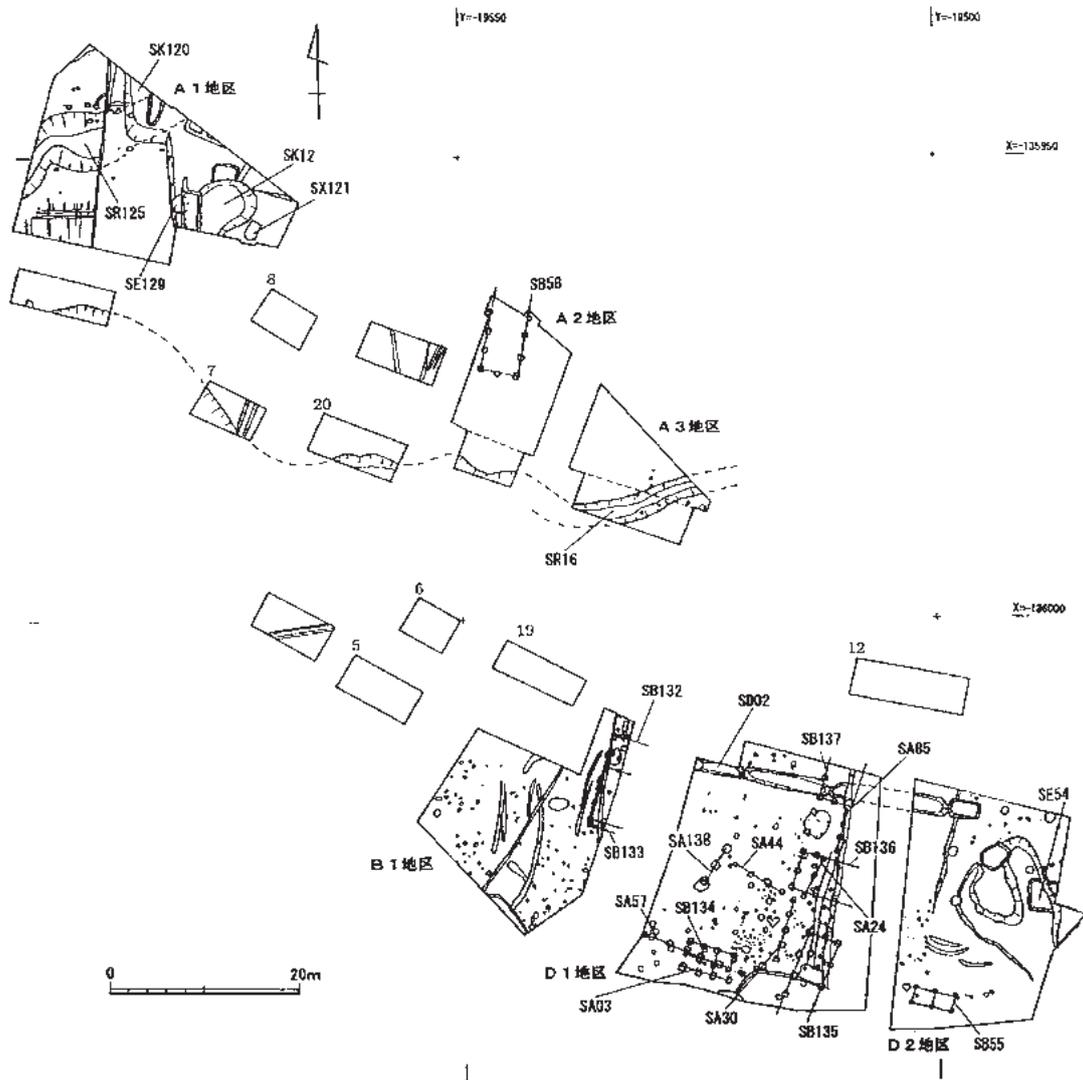
B1地区 多数の柱穴跡と溝を検出したほか、調査地東端付近から南北棟の掘立柱建物跡2棟(SB132・133)を検出した。建物跡は2棟とも建物東部が調査地外となるが、SB132は2間×4間、SB133が2間×3間の規模を測る。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

D1地区 多数の柱穴跡と掘立柱建物跡4棟(SB134～137)や柵列7基(SA03・24・30・44・57・85・138)の他、溝状遺構SD02などを検出した。建物跡と柵列はその方向性から3群に大別できる。A群(N-18°-E)はSB134・136・137の3棟とSA03・30・85の3条、B群(N-23°-E)はSB135とSA57、C群(N-33°-E)がSA24・44・138の3条である。平安時代後期～中世の遺物の出土をみている。

D2地区 掘立柱建物跡SB55、柱穴跡、井戸SE54などを検出した。SB55はD1地区の



第 2 図 下馬遺跡検出遺構配置図

A 群に含まれる。ここでも平安時代後期～中世の遺物の出土をみた。

2) 片山遺跡

A 1 地区 下馬遺跡 D 2 地区の南東約 50m に位置する。南北棟の掘立柱建物跡 2 棟、溝・土坑を検出した。2 棟の建物跡方位は座標軸にほぼ合致する。時期は奈良時代とみられる。

まとめ 今回の調査で、これまで散布地とされていた下馬遺跡と片山遺跡は、集落遺跡であることが判明した。下馬遺跡は縄文時代晩期～室町時代の複合遺跡で、平安時代と室町時代を中心とする遺跡である。火舎や中世瓦が出土したことから、室町時代には丘陵裾部に寺院関連施設が存在したとみられる。また、片山遺跡は弥生時代(石包丁出土)から中世にかけての遺跡で、A 1 地区周辺に奈良時代の遺構がさらに存在すると考えられる。

(竹原一彦)

つばい 25. 椿井遺跡(第3次)

所在地 木津川市山城町椿井松尾

調査期間 平成21年10月28日～平成22年2月18日

調査面積 1,200㎡

はじめに 椿井遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡で、弥生時代の高地性集落ということがよく知られている。過去の調査において、縄文時代の墓の可能性のある土坑や弥生時代の竪穴式住居跡がみついている。

今回の調査地は椿井遺跡の南西部の丘陵上に位置する。平野側には椿井天上山古墳、南西の谷には松尾古墳群が所在し、東側には松尾廃寺と松尾神社が隣接する。松尾神社では平成7年度の表門の解体修理に伴う発掘調査で、鎌倉時代に遡る土塀が検出された。ほぼ同じ場所にあったと考えられている松尾廃寺は古代の寺院跡で、周辺で白鳳期の瓦が出土している。平成11年度の調査では、寺域西辺の築地雨落ち溝が確認された。なお、当地には近世に松尾神社の神宮寺である松尾山角之坊伝興寺があったと伝えられている。

調査概要 調査にあたっては、道路の路線内に3か所の調査区を設定し、それぞれ北から1～3トレンチとした。

1トレンチでは竹の子栽培により遺構面は削平されており、遺構は検出できなかった。出土遺物としては、弥生土器と思われる小破片が少量出土したのみである。

2トレンチでは飛鳥時代の溝S D44と建物S B01・02、柵列S A03のほか、弥生時代以前の土坑、中世以降の柱穴や土坑がみつかった。溝S D44は南東から北西方向に向かう溝で、幅0.8～



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 田辺)

1.6m、検出長9m、深さ0.4mである。東西とも調査地外に続いていく。溝の中からは飛鳥時代の須恵器の杯や甕、土師器の甑や甕が出土した。建物S B01は東西方向の建物で、規模は梁行2間(3.6m)、桁行3間以上(4.2m以上)である。建物の東側は調査地外に延びていく。柱穴は直径0.3～0.5mの不整円形で、深さは0.2～0.4mである。柱穴からは土師器片が出土した。建物S B02は、東西方向の建物で、規模は梁行2間(4.7m)、桁行4間以上(6.2m以上)である。建物の東側は調査地外に延びていく。柱穴は直径30～50cmの不整円形で、深さは10～

60cmである。柱穴からは土師器片が出土した。柵列 S A03は、おおよそ南北方向の柵で、2間分(5.3m)がみつかった。柱穴の一つからは弥生土器片が出土した。

これらの建物や柵列は柱穴の埋土が溝 S D44とよく似ていることから溝と同時期の飛鳥時代の可能性が高いと考えられる。

また、調査地の北部では、弥生時代の高杯や甕が数个体残りのよい状態で出土した。近くで炉跡も見つかっており、竪穴式住居跡があったと考えられる。弥生土器が集中して出土した部分の下層では平面5×7m、深さ約0.2mの長方形の土坑を確認した。出土遺物はなく、時期等は不明である。

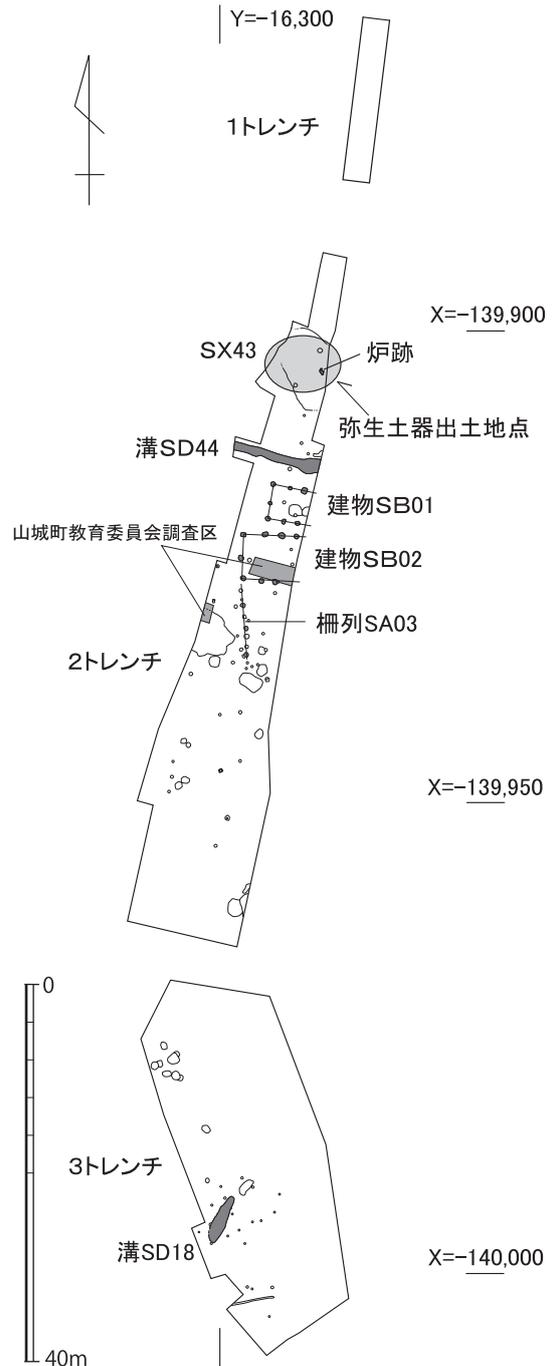
3トレンチでは飛鳥時代の溝 S D18のほか、中世以降のピットが見つかった。溝 S D18は北東から南西方向に向かう溝で、幅1.5m、検出長5m、深さ0.5mである。溝の中から飛鳥時代の短頸壺が1点出土した。

2・3トレンチの出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器や瓦及び石鎌がある。これらの遺物の時期は弥生時代・飛鳥時代そして中・近世である。瓦は鎌倉時代と近世のものが中心である。

まとめ 今回の調査では、弥生時代・飛鳥時代そして中・近世の遺構や遺物がみつかった。弥生時代については比較的残りの良い土器がまとまって出土したが、竪穴式住居跡が複数基分布するような状況は確認できなかった。飛鳥時代ごろに大部分が削平されたためと考えられる。

飛鳥時代の溝や建物については、遺物はこれまでも出土していたが、遺構を確認したのは今回がはじめてで、大きな成果といえる。時期的には松尾廃寺の創建時期より古いが、寺院の造営と何らかの関係がある施設である可能性が考えられる。中・近世の遺構や遺物については、松尾廃寺や伝興寺に伴うものと考えられる。

(松尾史子)



第2図 調査地遺構平面図

かみこまきた やなぎだ
26.上狛北遺跡・柳田遺跡

所在地 木津川市山城町上狛宝本ほか

調査期間 平成21年10月27日～平成22年2月25日

調査面積 1,000㎡

はじめに 今回の発掘調査は、主要地方道府道上狛城陽線の新設工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。上狛北遺跡・柳田遺跡は、木津川の左岸に形成された氾濫源ならびに後背湿地上に立地し、遺物散布地として知られていた。10か所の調査区を設定し、第1～8トレンチが上狛北遺跡、第9・10トレンチが柳田遺跡にあたる。

調査概要 10か所の調査区のうち、第1トレンチでは中世の柱穴・溝・土坑などを検出し、11世紀後半から12世紀にかけての土師器や瓦器などが出土した。一方、第2・3トレンチではほぼ同時期の耕作溝が多数検出された。

第2・3トレンチでは上記の上層遺構面よりも約10cm下で奈良時代の南北方向の溝各1条を検出した。第2トレンチの溝は幅1.0～1.5m、深さ0.4～1.0mを測り、8世紀中頃(奈良時代中頃)の須恵器や土師器、瓦などが出土した。第3トレンチの溝は第2トレンチで検出した溝の北への延長上にあたり、出土遺物もほぼ同時期のものである。幅1.0m前後、深さ0.2～0.3mを測り、両トレンチで検出した溝は総延長80mを測る。奈良時代における南北方向の溝であることから、公共性の強い施設に伴う区画溝や排水路などが考えられる。また、両トレンチの下層遺構面よりもさらに下層から古墳時代の土師器や須恵器が出土した。

第4～10トレンチについては、砂層と粘土層の堆積を確認しただけで、顕著な遺構は検出されなかった。土層の観察状況からは池状の溜まりが存在し、水が流れたような痕跡は認められなかった。砂層からは、少量ながらも、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土した。

まとめ 調査の結果、第1～3トレンチでは古墳時代・奈良時代・中世の各時期の遺構・遺物を検出し、調査地とその周辺に遺構・遺物が広がることが確認できた。一方、第4～10トレンチでは少量の遺物が出土したものの、安定した遺構面は確認できなかった。これらの遺物は、土層の堆積状況より、洪水等によって調査地の周辺から流れ込んだものと思われる。

(筒井崇史)



調査地位置図(国土地理院 奈良 1/50,000)

発掘余話事始め・災害と考古学

当京都府埋蔵文化財調査研究センターも平成22年には、設立30周年を迎えます。府内全域で年間平均30か所、多い年には40か所以上の調査を実施しています。発掘調査は、地下に埋まった埋蔵文化財を明らかにする作業ですが、当然、最初は何が埋まっているのかわかりません。古墳時代の集落跡を予想して発掘調査を進めたところ、奈良時代の祭祀に関わる遺構が見つかったこと、中世の城跡(山城)として知られている遺跡が、その地域を代表する大型古墳であったことなど、調査担当者の予想が大きくはずれる調査も数多く経験しました。

人は年齢を重ねるとともに、自分の足跡、過去を振り返ると言われます。調査担当者の試行錯誤や、時には失敗を軌道修正した経過などを含めて、「過去の調査」を振り返るシリーズを、先号までの「遺跡でたどる京都の歴史」を引き継ぐものとして、企画しました。

「発掘余話」の第1回として、遺跡の調査のなかで見つかった「自然災害」をテーマとしました。地震、河川の氾濫、地球温暖化による海面の変動を取り上げました。

地震痕跡は、南山城地域の多くの遺跡で見つかる「噴砂」(1596年の伏見地震による)がよく知られています(「地震痕跡 遺跡でたどる京都の歴史」第7回 『京都府埋蔵文化財情報』第109号)。一方、丹後半島の古墳を調査すると、北丹後地震(1927年)により埋葬施設が大きく引き裂かれたり、しわ状にひびが入る例が、京丹後市谷奥古墳群などでみつかっています。舞鶴市浦入遺跡(平安時代の製塩遺跡)では、基盤土である地山が地滑りによって、製塩遺構の上に覆い被さり、地山と思われる堆積土の下で、炭・焼土、遺物がパックされた状態でみつかりました。調査担当者はその解釈に戸惑うばかりでした。

河川の氾濫を残す調査例も数多くあります。大山崎町下植野南遺跡では、河川の氾濫土砂で弥生時代中期の方形周溝墓が埋没し、砂礫で厚く覆われ、その上に古墳時代前期～後期の集落が営まれていました。八幡市内里八丁遺跡では、河川の氾濫土砂に覆われ、水田が復旧されることなく、うち捨てられていました。当時の人びとは、ムラや水田の土砂を取り除いて復旧するのではなく、新しいムラを作って移動したり、同じ場所の上に新たな水田を作ったのでした。

気候変動・地盤沈下がわかる調査もあります。舞鶴市志高遺跡では、縄文時代の遺構が7000年の間に沈降したと考えられています。同じ舞鶴市の浦入遺跡では、縄文時代の気候変動によって砂嘴の形成過程と海面の上昇(海進)、下降(海退)の様子がわかりました。

地中には人の記録と共に災害の記録も残っています。災害とどのように付き合っていくのか、地球環境はどのように変わっていくのか、を知るためにも、過去の災害を知ることが不可欠であると思われまます。

(石井清司)

地震で引き裂かれた古墳（^{たにおく}谷奥古墳群）

1927(昭和2)年3月7日、丹後半島は巨大な直下型の地震に襲われました。マグニチュード7.3で、死者2925人、負傷者7839人、全壊家屋12584棟など、丹後地域に甚大な被害をもたらしました。

丹後地域で古墳を調査すると、地震痕が見つかることがあります。京丹後市大宮町通り古墳群では、古墳の中央に地割れがはいり、主体部が真っ二つになっていました(写真1)。そのほか、網野町スガ町古墳群、同生野内城跡、同浅後谷南墳墓、弥栄町遠所古墳群で地震痕跡が見つかっています。

2008年に調査を行った京丹後市弥栄町谷奥古墳群では、地割れとともにしわ状のひびが見つかりました(写真2)。

谷奥古墳群は、丘陵の尾根を階段状に整形した古墳が連続して造られています。標高47~66mの一つの尾根に7基の古墳が造られていますが、地割れが見つかったのは、丘陵頂部の2号墳だけでした。頂部からやや下った標高64~66mの南側部分に幅3~30cmの地割れが約5mの幅の中で見つかりました。地震動により、丘陵の南半分の斜面が地滑りを起こし、その際に、割れ面に沿って地割れが生じたものと判断されます。

この地割れの中には腐植土が入り込んでいたもので、さほど古い時代に地割れが生じたとは考えられません。1927年の地震によるものでしょう。

地震考古学者の寒川旭さんのお話によると、この地割れをもたらした地震は、標高64~66m付近だけを大きく揺らしたためではないか、とのことでした。近年、ビルが高層化したことで、ビルの固有振動数が長周期地震動に合致し、ビルが共鳴して大きな揺れが観測されることが問題になっています。ちょうど、そのような状況にあったのではないか、というのです。

しかし、丹後地域の山の上の遺跡で見つかる地割れは標高65~90mと幅がありますし、隣り合ったほぼ同じ高さの丘陵頂部であっても地割れが見つかるとは限りません。

地震の被害がどういったところに起こるのか、どういうパターンがあるのか、防災という観点からも、そのメカニズムの解明が待たれます。

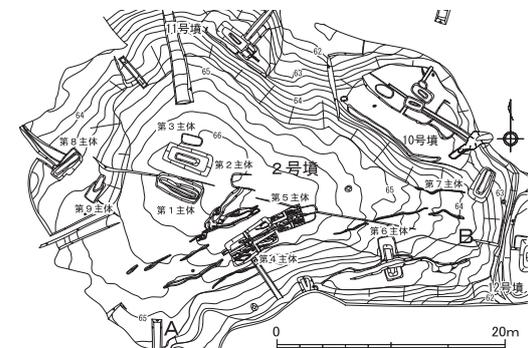
(岩松 保)



写真1 通り古墳群の地割れ



写真2 谷奥2号墳の地割れとしわ



谷奥2号墳の地割れの分布 (A-Bが地滑り)

地崩れで埋まった遺跡（浦入遺跡）^{うらにゅう}

発掘調査では、重機で表土を掘削し、人力で地面をきれいにすると、昔の人が住んでいた竪穴式住居跡や柱の穴、溝などの輪郭が現れてきます。発掘調査を行う私たちは、このようにして現れた輪郭から遺跡のようすを予想し、想像しながら発掘の作業を進めていきます。

ところで、舞鶴市浦入遺跡を調査したときのことです。調査を進めると、黄色い地面の上に黒い土が入った輪郭が見えてきました。これを掘っていくと、通常は平らであったり鍋のような丸底になるのに、ここでは穴の底が斜めに入り込んでいました。さらにこの穴がまっすぐではなく、がたがたになったりしていました(写真1)。「私たちがいつも調査をしている遺構の状況とは違うぞ」という思いがしました。

さらに調査を進めていくと、黒い炭や灰の層が、この黄色い土の下に入り込んでいくことがわかりました。普通、黄色い土は人の手が加わっていない古い地層、黒い土は何らかの人為的な手が加わっている新しい地層と理解されているのですが、ここでも、上の黄色い土はとてもきれいで、人の手が加わっているとは思えませんでした。

土層の形成された順序が一見逆転しており、通常の解釈では理解できませんので、土層断面を観察することとし、重機で1mほど断ち割りました。すると、なんと、黄色い地層の下に真っ黒

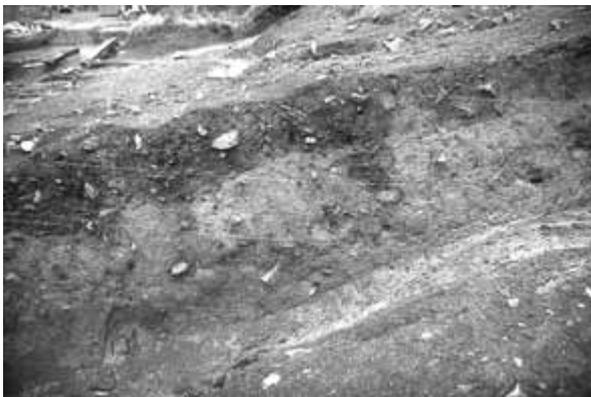


写真1 崩壊した遺構としわ

い土が堆積しているではありませんか(写真2)。また、がたがたの遺構も土層断面を見ると、確かに斜めを向いていることがわかりました。

次に、なぜこうしたことが起こったのか考えました。断ち割った地層の状態を詳しく観察していくと、もともと遺構が形成されていた黄色い地層が、まるごと下方にあった炭や灰の層の上に滑り落ちた可能性が高いということがわかってきました。

つまり、直接的な原因は不明ですが、大規模な地滑りが起きたと想定すると、形が崩れた遺構の存在や、炭・灰層の上にきれいな黄色い土の層があることの説明ができます。

この地滑りにより、人々の生活に何らかの影響があったと考えられますが、詳しくはわかりません。遺跡の調査を通じて、改めて自然の力のすごさを知りました。(筒井崇史)



写真2 炭・灰層と地滑りの跡
(人が乗っているのが地滑りした土の上面です)

地中深くに埋まった遺跡（^{しもうえのみなみ}下植野南遺跡）

京滋バイパスと名神高速道路を結ぶためのジャンクションが、大山崎町内に計画されました。この大山崎ジャンクションの建設工事に先立ち、平成10年度から5年間をかけて、下植野南遺跡の発掘調査を実施しました。この遺跡は、上層で主として古墳時代の集落跡を調査し、下層では弥生時代の方形周溝墓の調査を行いました。

古墳時代の集落跡は地表下約3mにあり、厚く砂礫土が堆積していました。この堆積土は近接して流れる小泉川が運んできた土砂で、何度も小泉川が氾濫したと推測されました。また、古墳時代の集落跡も小泉川から運ばれた砂礫の上にあったので、古墳時代の人々が掘り込んだ堅穴式住居や土坑の跡を土質の違いで見極めるのは非常にむずかしい状況でした。精査を加えて顔を出した小さな土器を手掛かりに、「このあたりに堅穴式住居跡などの遺構があるはず」と信じて、何度も精査を加えてやっと遺構が見つかる状況でした。悪戦苦闘の結果、調査地内で50基以上の堅穴式住居跡が見つかり、乙訓地域でも有数の集落跡であることがわかりました。

古墳時代の集落跡の調査も終盤にかかり、遺跡の全体を記録するために空撮作業を残すだけとなりました。8,000㎡にもわたる大きな調査も、やっと終了するものと、安堵していましたが、全体写真のそうじをしていると、10m四方程度の大きさで、網の目状に黒い土が地面に浮かんだ状態が認識できるではありませんか(写真)。「古墳時代以前の墓の跡があるかもしれない」と考え、写真撮影後に網の目状の黒土を除去していきました。

その結果、弥生時代中期の方形周溝墓を30基以上検出しました。珍しいことに、溝で囲まれた墳丘には盛り土がよく残っていました。また溝内からは良好な状態で遺物が出土し、近畿地方でも有数の弥生時代の墓地であることがわかりました。

この遺跡は小泉川の氾濫原にあり、当時の人々は稲作には適さない砂礫の上を選んで住んでいました。大雨の後には小泉川の氾濫により集落が大きな被害を受けるなど、不安定な場所であったと思われます。しかし、河川の横は田畑に水を入れるのに適した場所ですし、長年にわたって耕してきた田畑がこの近くにあったために、この地に住み続けたと考えられます。

しかし、彼らの墓や集落は、小泉川の氾濫の土砂により何度も埋没してしまいます。調査の成果からは、長い期間にわたってうち捨てられていたようです。逆に、そのおかげで、当時の集落の様子を如実に伝えてくれたのでした。(石井清司)



下植野南遺跡の網の目状の遺構

洪水で見捨てられた水田 うちさとはっちょう（内里八丁遺跡）

平成2年に実施した八幡市内里八丁遺跡の発掘調査で、弥生時代後期頃の水田跡(上下2面)がみつかりました。上層の水田跡は地表下約1.8m(海拔約11m付近)、下層の水田跡はその下20～30cm付近にありました。それまで内里八丁遺跡は古墳時代以降の遺跡とされていましたが、この調査で、府内ではじめて古墳時代以前の水田跡がみつかり、予想外の成果を得ました。

古墳時代の遺構面を調査している際に、写真撮影のため検出した溝の汚れた壁面を削っていたところ、それまで遺構・遺物が存在しないと考えていた遺構面下の砂層(厚さ約20cm)から土器の破片が出土しました。それまでにも、この遺構面の下に堆積している粘質土層や砂層を何度も精査し、観察を繰り返していましたが、遺物が出土しないので自然堆積層と判断していました。

土器の破片が出土したので、この遺構面の下層で遺構があるのかないかを確認するため、部分的に砂層を取り除くと、直線的に延びる暗灰色粘土質の細い帯が現れました。最初は溝と判断しましたが、やがて丁字や十文字に分岐し、方形にも巡ることがわかりました。この状況にいたって初めて、粘質土の帯が水田の畦畔であることがわかりました。上層の水田跡では、約1,800㎡の調査範囲内から大小60枚の水田区画がみつかり、下層の水田跡では大小32枚の水田区画がみつかりました。これらの水田面には無数の稲株跡が存在しました。この、稲株跡の分布状況から、田植えを行っていたことも明らかになりました。

水田跡は、水田土壌と異なる土砂が水田を覆った場合に比較的容易に検出することができます。多くの場合、それらは洪水・火山噴火・土砂崩れ等の自然災害や人為的な盛土で覆われています。当時は、自然災害後の土砂除去などの復旧作業は人力に頼るしかなく、多大な労力と時間を費やします。小規模災害であれば水田の復旧も容易ですが、大規模災害では一部の水田を除き、多くの水田はそのままに見捨てられたからでしょう。

内里八丁遺跡で検出した水田跡は、南山城地域を南北に流れる木津川の氾濫のため、下層の水田跡は20～30cmの洪水砂で覆われており、その上に上層の水田が造られていました。当時の人々は水田の復旧よりも新たな水田を造る道を選択しました。その方が、復旧するよりも労力や時間を節約できたのでしょう。



内里八丁遺跡の水田跡

内里八丁遺跡の水田は災害のため見捨てられましたが、幸運にも発掘調査により、千数百年の時を経て現代にその姿を現しました。もし、古墳時代溝の壁面から遺物が出土しなければ、水田跡はその存在すら知られていなかったでしょう。詳細な観察や検討を行うことの大事さを再認識することとなりました。(竹原一彦)

沈んだ遺跡（志高遺跡）

発掘調査で地表近くの遺構から掘り進めていくと、思ってもみない深いところからより古い遺構面(当時の生活面)が検出されることがあります。1986年に由良川の河川改修に伴って実施した舞鶴市志高遺跡の縄文遺跡の調査はその典型例です。

遺跡は由良川左岸の自然堤防上にあり、調査前は標高6.2mほどの微高地の上に茶畑が広がっていました。事前に舞鶴市教育委員会の試掘調査により、弥生時代から江戸時代までの2000年におよぶ継続的な集落遺跡であることがわかっていました。特に弥生時代中期には、由良川下流域の中心的な集落遺跡としてよく知られていました。その弥生時代の遺構面の下には砂層が厚く堆積しており、それよりも深い地点に、より古い遺構が眠っていることは予想されていませんでした。ところが、偶然、1985年の調査時に、河川の改修工事の終わった上流側の地点で、地表より4.5mほど下に厚さ1m以上の縄文時代の包含層が露頭していることがわかりました。翌年、この部分を調査すると、縄文時代前期後葉～初頭の4時期の遺構面を標高2.0m付近、1.6m付近、1.3m付近、0.8m付近で検出しました。また、湧水のため部分的な調査しかできませんでしたが、早期末の包含層を地表下6.8mの標高^{マイナス}-0.5m付近で検出しました。実に7000年の間に遺跡の上に6.8mの土砂が堆積していたのです。しかし残念ながら、数千年にわたる河川の影響のためか、工事予定地内で包含層が残されている範囲は、わずか約300㎡でした。

ところで、この堆積は由良川の河川堆積がもたらしたものですが、どうもその影響だけで、遺跡が7m近くも埋没したのではなさそうです。

今から7000年前から5000年前は縄文海進の時代で、地球の温暖化により南極・北極の氷が溶け、現在の海面より2m以上水位が上昇していたと考えられています。そうすると、志高遺跡の縄文時代の遺構面は、当時の海面よりも下にあったこととなります。これでは縄文人は生活できません。どうもこの7000年の間に遺跡自体が沈降したことが予想されるのです。同じ状況は、遠く福

井県若狭町鳥浜貝塚や京丹後市松ヶ崎遺跡そして松江市西川津遺跡といった縄文遺跡でも認められています。広く日本海側の遺跡が沈降したことを示しています。

東日本に縄文文化が栄え、東高西低といわれる縄文時代ですが、西日本の縄文遺跡の多くは地中深くに眠っており、私たちが発見してくれるのを待っているのかもしれない。



水面近くで検出した縄文時代前期初頭の炉跡群

(肥後弘幸)

砂に埋もれた舟（浦入^{うらにゅう}遺跡）

舞鶴市浦入遺跡では、縄文時代前期の丸木舟がみつかりました。自然科学分析の成果を受け、縄文時代の気候変動や、丸木舟を介した交流などの資料を得る調査となりました。

発掘調査では、遺構面までの土砂を除去しますが、時間と労力を節約するため、重機により掘削作業を行なうことがあります。発掘担当者が、慎重に地層の状況を確認して掘削を進めます。

さて、浦入遺跡R地点は砂浜にあり、昔の人が生活したような安定した地盤はないだろう、調査は短期間に終わるだろうと予想していました。砂浜を重機で掘削していくと、地表下1.5m、現在の海面よりも1mも下の砂の中に木材が見え、「砂浜に流れついた流木かな？」と思いつつも掘削を進めました。木材は徐々に姿を現し、断面が皿状に丸くなっています。「人工的に作られたものかな?」、「まさか丸木舟では」という不安と期待で胸がいっぱいになりました。

重機掘削作業を中断し、この木材の形をみるために海成砂を慎重に除去したところ、舳先が顔を出し、やはり丸木舟であることがわかりました。最終的に、全長5m、幅1mのスギの大木を用いて造ったものでした。周辺調査を進めていくと、海成砂の中に縄文時代前期(大歳山式)の土器がみつかり、縄文時代前期のものであることが確定しました。実際、丸木舟をC¹⁴炭素年代測定方法で測定したところ、スギが伐採されたのは今から約6000年前であることがわかりました。

この丸木舟は現在の海面よりも1m下でみつけましたが、調査地の土層の堆積状況を観察すると、当時は陸地であったことがわかりました。また砂の中に、貝類が生息した貝穴があることから、陸といっても海辺の汀であったようです。花粉分析により、この上層では葦などが自生していたこともわかりました。また、丸木舟を取り上げる段階で、堅果類を貯蔵した貯蔵穴が舟の下にあることがわかり、この場所がある時期にはかなり内陸部にあったこともわかりました。

以上のことから、この地点は陸と海に繰り返し変わっていたことがわかりました。

さて、周辺の遺跡の調査成果をあわせると、この遺跡の所在する浦入湾の状況がわかってきました。20000年前には、気候の寒冷化のため海の水が凍って少なくなり、海面は今よりも約100

m海側に後退していました。その後温暖な気候となり、徐々に海面が上昇し、丸木舟が使用された6000年前には現在の海面よりも約4m程上昇していました。この時期に、丸木舟を利用して外海に漕ぎ出し、沿岸伝いに、北陸や新潟まで漕ぎ出したことでしょう。そして、ある時に海の中に沈められ、長い間、砂の中で眠っていたのです。(石井清司)

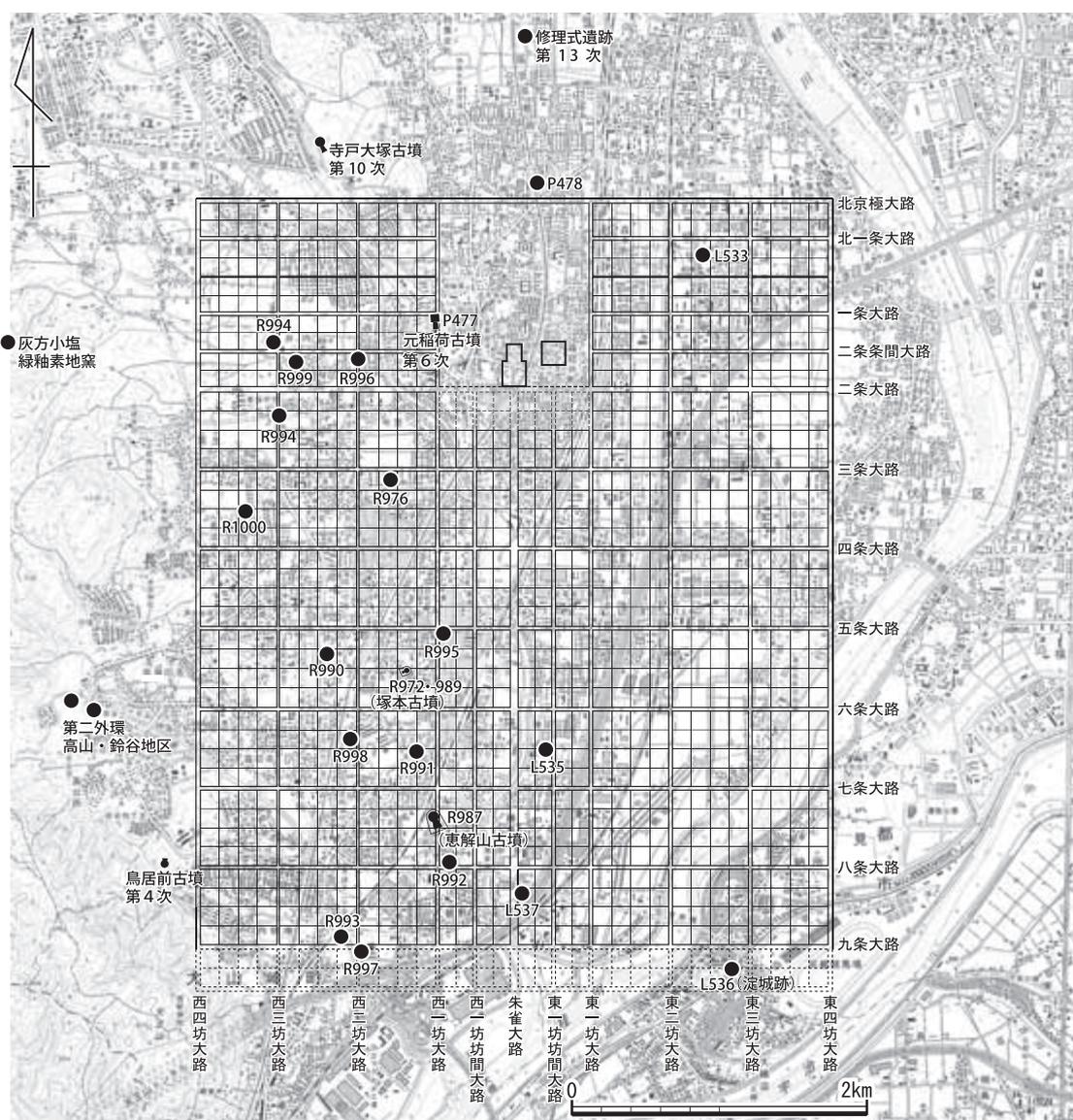


浦入遺跡の丸木舟

長岡京跡調査だより・108

長岡京跡発掘調査の情報交換及び資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成22年2月から5月の例会では、宮域2件、左京域4件、右京域13件、京域外7件、あわせて26件の調査報告があった。そのなかで、主要な事例について報告する。

宮域 宮跡第477次調査(向日市向日町)では、乙訓地域で最古級の首長墓である元稻荷古墳の後方部西側の調査が実施された。その結果、墳丘下段の外部施設および墳丘の構築方法について、その詳細が明らかとなった。今までの調査によって、段築成された墳丘の下半部には葺石が葺か



調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復元を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

れており、その外周に幅1 m弱のテラスが巡って基壇状を呈した墳丘の存在が知られていた。この土層を断面観察した結果、基壇(=第1段墳丘、高さ約1.4m)は、その下半部の約1/3が基盤層の削り出しにより成形され、それよりも上位の盛土は、外周縁に土堤状の高まりをまず設け、次いでその土堤の内側に土を充填しつつ平坦面を形成し、この工程を上位に繰り返すことで、墳丘を構築している様子が明らかとなった。2段目墳丘斜面の葺石は、斜面裾にやや大きな石を面を揃えて急角度に据え、その上方には拳大の石をやや緩やかな勾配で貼り付けていた。また、後方部の西辺と南辺で、基底石の置き方が、長軸が横方向・縦方向と異なっていることが判明した。

左京域 左京第533次調査(向日市森本町)は、左京一条三坊一町に位置するが、長岡京期の土地利用の形跡はなく、中世(13世紀後半～14世紀前半)の居住を示す遺構が検出された(戊亥遺跡)。

左京第535次調査(長岡京市神足)では、側板を杭止めした護岸施設をもつ七条条間小路の南側溝が検出された。溝内から、墨書土器や各種の木製品(木製皿・曲物など)、漆器、供膳具を主体とする完形の土器類が出土した。

右京域 右京第994次調査(長岡京市井ノ内)では、道路拡張に伴い、2地点の調査が実施された。南側の地点では、弥生時代後期の逆台形断面を呈する大規模な溝と、その土層からは古墳時代後期の竪穴式住居跡2基が検出された。これより約500m離れた北地区は、長岡京条坊復元では西三坊大路位置にあたるが、路面や西側溝は確認されず、代わって掘立柱建物跡2棟が検出されている。

右京第995次調査(長岡京市開田)では、調査地の北端において長岡京期の土坑に後出する東西溝(中世か)が2条認められ、それより南側では、方位に斜交する数条の溝が検出された。このうち、幅約2 mを測る2条の溝は、一辺約15mの方墳の周溝に復元される。溝内埋土中から須恵器(蓋杯類と大甕)と土師器の小型の甕が、数か所に集積された状態で出土した。調査地周辺は開田古墳群の東羅支群にあたる。

右京第996次調査(長岡京市井ノ内)は、西二坊大路の推定路面上に位置するが、長岡京期の遺構は確認されず、廃都後まもなく開削された東西溝が検出された。幅1.5～2.5mの溝の両岸には、木杭と横木による護岸施設が施され、その一端に木製槽を杭で固定した施設(取水施設か)が取り付け。この溝を境界にしてその南側は礫を薄く敷き詰めた整地面が広がる。

京域外 灰方小塩緑釉素地窯(京都市西京区大原野)は、9世紀第3四半期操業の窖窯である。約60m離れて2基確認され、いずれも登窯で、両窯ともに本体長6 m前後を測る。焚口を残す3号窯の焼成部床面や灰原から須恵器に混じって緑釉素地が出土し、洛西古窯群における緑釉生産窯として新たな検出例となる。

(伊賀高弘)

普及啓発事業（3月～6月）

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

現地説明会

宇治市萬福寺松隠堂庫裏の調査は、庫裏の解体修理に伴って実施しました。その結果、曳屋(建物を解体しないで移動)された直後の庫裏が1間分東に建てられていたこと、その規模は南北4間、東西6間であったこと、その後、さらに西へ1間分曳屋されて現在地に移されるに伴い竈も移設されていたことなどがわかりました。3月22日(土)に保存修理事業を実施している京都府教育庁指導部文化財保護課とともに、10時から14時まで現地説明会を行い、150名を超える方々に足を運んでいただきました。隠元禅師隠居所の台所の変遷について説明しました。また萬福寺に参詣され、偶然に説明会に参加された方は、重要文化財の建物の床下まで見ることができたと喜んでいただきました。



井脇城跡現地説明会風景

京丹波町井脇城跡の調査では、室町時代後期の山城の曲輪跡を確認しました。本丸は調査対象地から外れますが、標高270mの非常に見晴らしの良い尾根筋に築かれた曲輪は、出丸的な施設とも考えられます。約300㎡の平坦面の縁に、「コ」の字状に幅2.5m、高さ0.8mの土塁が築かれていました。6月12日(土)に現地説明会を開催したところ、地元の方や丹波の山城に関心を持たれる多くの方が参加され、担当者からの説明はほどほどに、城談議に花が咲いていました。

遺跡見学・体験学習等

5月19日(水)に慶応義塾女子高等学校の修学旅行生5名が、引率の教員とともに平安京跡の現地見学に来られました。修学旅行の行程に遺跡見学を希望した学生達は、熱心に担当者の説明を聞き、ノートや説明資料にメモをとっていました。

(水谷壽克)



平安京跡現地見学風景

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

(平成22年6月1日現在)

理事長

上田正昭
(京都大学名誉教授)

副理事長

中尾芳治
(恭仁宮跡調査専門委員会委員長)

常務理事

小池 久

理事

石野博信
(兵庫県立考古博物館長)

井上満郎

(京都産業大学文化学部教授)

都出比呂志

(大阪大学名誉教授)

中谷雅治

(元京都府教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱)

高橋誠一

(関西大学文学部教授)

増田富士雄

(同志社大学理工学部教授・京都大学名誉教授)

上原真人

(京都大学大学院文学研究科教授)

藤井 貢

(京都府文化環境部文化芸術室長)

高熊秀臣

(京都府教育庁指導部長)

川村 智

(京都府教育庁指導部文化財保護課長)

監事

清水浩平

(社団法人全国国宝重要文化財所有者連盟庶務部長)

橋本幸三

(京都府教育庁管理部長)

事務局長

小池 久

副局長

安田正人

総務課

長 安田正人(兼)

総務係長

杉江昌乃

主任

今村正寿

主事

鍋田幸世

主事

須田千春

副主査

橋本清一

(再雇用：府立山城郷土資料館へ派遣)

調査第1課

課長

肥後弘幸

主幹

水谷壽克

企画係長

水谷壽克(事務取扱)

主査調査員

伊賀高弘

資料係長

岩松 保

主任調査員

田中 彰

調査第2課

課長

肥後弘幸(兼)

主幹

石井清司

課長補佐

小池 寛

調査第1係長

小池 寛(兼)

次席総括調査員

辻本和美

主任調査員

引原茂治

主任調査員

竹原一彦

専門調査員

黒坪一樹

主査調査員

柴 暁彦

調査員

松尾史子

副主査

小山雅人(再雇用)

調査第2係長

石井清司(事務取扱)

主任調査員

戸原和人

主任調査員

増田孝彦

主任調査員

中川和哉

専門調査員

岡崎研一

調査員

奈良康正

調査員

古川 匠

調査第3係長

石井清司(事務取扱)

次席総括調査員

伊野近富

次席総括調査員

田代 弘

専門調査員

竹井治雄

専門調査員

石尾政信

調査員

高野陽子

調査員

筒井崇史

調査員

村田和弘

センターの動向

(平成22年3月～平成22年6月)

月日	事	項
3 2	京都府人権問題特別研修5 (於：研修センター) 黒坪一樹専門調査員、松尾史子調査員受講	
3	「改正育児・介護休業法説明会」(於：京都市) 杉江昌乃総務係長出席	
	第3回人権教育(教育局別)行政担当者等研究協議会(於：向日市) 小池 寛調査第2課課長補佐、森 正調査第2係長、今村正寿総務課主任受講	
4	椋ノ木遺跡(精華町)発掘調査終了(11/26～)	
5	金沢城調査研究埋蔵文化財委員会(於：石川県) 森島康雄主任調査員派遣	
7	スライドでみるおとくへの発掘(於：向日市) 岡崎研一専門調査員派遣	
15	職員人権研修「平成21年度を振り返って・課題の取り組み状況」他	
17	長岡京連絡協議会	
18	第2回京都府中世城館跡調査委員会(於：京都市) 肥後弘幸調査第1・2課長出席	
22	萬福寺松隠堂現地説明会(参加者150名)	
	「京丹後市の考古資料」刊行記念シンポジウム(於：京丹後市) 肥後弘幸調査第1・2課長派遣	
26	第88回理事会・役員会(於：京都商工会議所) 上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、小池 久常務理事・事務局長、石野博信・井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・増田富士雄・川村 智各理事出席	
	人権研修推進委員会「次年度研修計画」	
31	監事退任 (別掲)	
	退職職員辞令交付 (別掲)	
4 1	採用職員辞令交付 (別掲)	
16	職員研修「2府1県埋蔵文化財の現状」講師；岩松保資料係長	
19	平安京跡(京都市)発掘調査開始	
21	長岡京連絡協議会(於：当センター)	
26	長岡京跡・井ノ内遺跡(長岡京市)発掘調査開始	
	長岡京跡・上里遺跡(長岡京市)発掘調査開始	
	長岡京跡・開田遺跡(長岡京市)発掘調査開始	
28	職員人権研修「平成22年度の人権に関する係目標と個人目標の設定と発表」	
30	大内北古墳群(京丹後市)発掘調査開始	
5 6	井脇城跡(京丹波町)発掘調査開始	
10	中山城跡(舞鶴市)発掘調査開始	

- 12 鳥取橋遺跡(京丹後市)発掘調査開始
- 13 女谷・荒坂横穴群(八幡市)発掘調査開始
- 16 日本海文化研究所公開講座(於：富山市)石井清司調査第2課主幹講師派遣
- 19 慶応義塾女子高等学校3年生5名平安京跡見学
- 21 長岡京跡・友岡遺跡(長岡京市)発掘調査開始
- 25 理事退任 (別掲)
- 退職職員辞令交付 (別掲)
- 片山・下馬遺跡(精華町)発掘調査開始
- 松山遺跡(京丹後市)発掘調査開始
- 26 理事就任 (別掲)
- 採用職員辞令交付 (別掲)
- 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 6 2 長岡京跡・上里遺跡(長岡京市)発掘調査終了(4/26～)
- 長岡京跡・開田遺跡(長岡京市)発掘調査終了(4/26～)
- 長岡京跡・松田遺跡(大山崎町)発掘調査開始
- 3 長岡京跡・第二外環状線道路関係遺跡高山地区(長岡京市)発掘調査開始
- 10 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：愛知県)小池久常務理事・事務局長、
安田正人副局長出席(～6/11)
- 企業内人権啓発推進員研修会及び学卒求人説明会 杉江昌乃総務係長出席
- 11 女谷・荒坂横穴群(八幡市)発掘調査終了(5/13～)
- 12 井脇城跡(京丹波町)現地説明会(参加者74名)
- 15 監事監査(事前補助監査)(於：当センター)
- 17 監事監査(監査・講評)
- 18 京都府庁開庁記念日記念式典(於：京都市)小池久常務理事・事務局長出席
- 23 第89回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、
小池久常務理事・事務局長、井上満郎・都出比呂志・中谷雅治・上原真人・藤
井貢・高熊秀臣・川村智各理事、清水浩平・橋本幸三監事出席
- 長岡京連絡協議会(於：当センター)
- 24 平安京跡(京都市)発掘調査終了(4/19～)
- 25 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：八尾市)岩松保資
料係長出席
- 29 井脇城跡(京丹波町)発掘調査終了(5/6～)

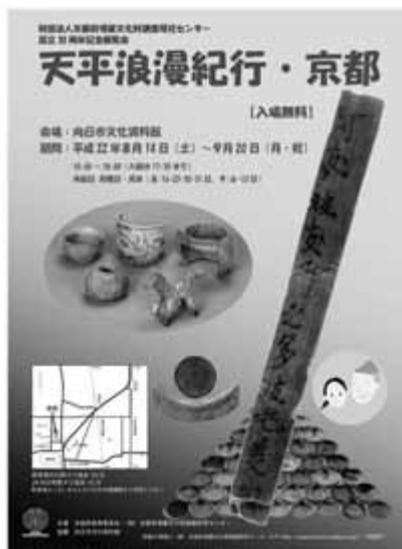
(別掲)

月日	事	項
3 31	大槻 茂(京都府企画理事・危機管理監兼会計管理者) 監事退任 小山雅人総括調査員 定年退職	

松井忠春主任調査員 定年退職

- 4 1 清水浩平(社団法人全国国宝重要文化財所有者連盟庶務部長) 監事就任
小山雅人調査第2課副主査採用(再任用)
- 5 25 山内 一(京都府文化環境部文化芸術室長)理事退任
森 正調査第2課第2係長退職(府派遣解除)
森島康雄調査第2課主任調査員退職(府派遣解除)
- 5 26 藤井 貢(京都府文化環境部文化芸術室長)理事就任
古川 匠調査第2課調査員採用(府派遣)

お知らせ



財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、昭和56(1981)年4月に設立され、平成22年度で30年目を迎えます。設立30周年を記念して、特別展覧会「天平浪漫紀行・京都」を開催します。

昨年度は、万葉歌木簡の出土や謎の寺・神雄寺の存在などで、木津川市馬場南遺跡が大きな話題となりました。今年、平城遷都1,300年の節目の年にあたることもあり、府内においても、全国的に見ても、奈良時代が注目を集めています。そこで、当調査研究センターでは奈良時代の京都に焦点をあてた展覧会を開催します。京都府内にある奈良時代の国府や官衙、古道、瓦や土器の生産遺跡、条里などの調査成果を紹介し、様々な遺物を展示・解説して、奈良時代の京都を描きます。

また、展覧会開催期間中に特別講演会を開催します。多数のご参加をお待ちしております。

(詳しくは当調査研究センターのホームページ<http://www.kyotofu-maibun.or.jp/>をご覧ください)

特別展覧会

- 期 間 平成22年 8月14日(土)～9月20日(月：敬老の日)
休 館 日 8月16日(月)・23日(月)・30日(月)・31日(火)
9月6日(月)・13日(月)
開館時間 午前10：00から午後6：00(入館は午後5時30分まで)
- 会 場 向日市文化資料館(向日市寺戸町南垣内40番の1)

特別講演会

- 日 時 平成22年 9月4日(土)午後1時30分～午後4時
- 会 場 向日市民会館(向日市寺戸町中ノ段17番の1)
- | | | | |
|------|--------------|------|--------------|
| 記念講演 | 「聖武天皇と天平文化」 | 上田正昭 | 当調査研究センター理事長 |
| 基調講演 | 「天平の寺とものづくり」 | 菱田哲郎 | 京都府立大学教授 |

編集後記

情報 112 号をお届けします。

今回から「遺跡でたどる京都の歴史」の後継として「発掘余話」を新たなシリーズとして立ち上げました。様々な切り口で、苦労話や体験談を含め、発掘調査の成果を掲載していく予定です。

前回の「遺跡でたどる京都の歴史」シリーズは、当調査研究センターの 30 周年記念事業として、単行本にまとめるための編集作業を進めています。大幅に内容も書き加えて、刊行予定です。ご期待ください。

(編集担当 岩松)

京都府埋蔵文化財情報 第112号

平成 22 年 7 月 30 日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER